329

168ロ

始

141

新譯源氏物語 下

紫式部

大正
15. 2. 18
内交

329-168

新譯源氏物語下卷 目次

御法	九二三
幻	九四五
匂宮	九六七
紅梅	九八三
竹河	一〇〇三
橋姫	一〇五七
椎本	一一〇七
總角	一一五三
早蕨	一二四九
寄生	一二六七
東屋	一三五九

浮舟　一三四
蜻蛉　一三七
手習　一六七
夢の浮橋　一七九

裝釘及繪畫

中澤弘光

紫の君はあの大患以後とかく健康が勝れないがちである。格別何と云ふ名のある病氣でもないのであるが次第にひよわい人になつて行つた。源氏の君がこのために心痛をしてお出でになることは大抵でない。たとへ暫くでもこの人と別れた後の孤獨が忍ばれ得やうかと來る日のお悲しまれになるのである。現世に何の不足も感せぬ迄の幸運を見、また心の殘る子もない紫の君は死に對する煩悶などはあまり無いのであるが、源氏の君と二人の中の愛情を思つては、殘つた一方の苦痛が想像されて、死を覺悟しながらも悲しかつた。後世のために

御法

と云つて佛供養を多くしながら、尼になつて、命のある間今暫くにもせよ俗縁を離れて佛に仕へて見たいと云ふ願ひは何度とも知れず源氏の君の前に持ち出されるのであるが、お許しがない。出家は源氏の君も年來お望みになつて居ることであるから、こんなに迄紫の君の云ふ時に御自身も一緒に僧になつてしまはうかともお思ひにならないではないが、一旦出家した上は假にも感情にかがつらつた見苦しい事などはしたくないともかねてのお考へなのであるから、こんなに心細い容體をした心に懸らないわけもない最愛の人と別々に居て、その志が行はれさうもないのが知れて居るからと、さう先がお見透かされになるので、このお許しも隨つてないわけなのである。自身一人でその處決をするのも人目に穩かでなくまた本意でもないと思つて紫の君は源氏の君を恨めしく思つて居た。これも自身の罪障の深いせいかも知れないなどと來世までを案じたりなどもして居た。昔からこの人

の信仰で自筆で寫された千部の法華經を佛の前に披露する法事を紫の君は自身の實家のやうに思つて居る二條院ですることにした。僧達に出される法服などが美くしい好みで既に調へられてあるのを御覽になつて、この人の何處迄も完全に行き屆いた心の貴婦人であるのを今更のやうに源氏の君は感じてお出でになつた。夕霧の君は儀式の舞や音樂の方を受け持つて眞心を籠めて奔走して居た。その日は陛下からのを初めとして、上皇、兩方の后の宮、東宮の御捧物を持つたお使が後から後から立込むだけでも騷しさ花やかさが一通りではなかつた。花散里の君、明石の君などもお二條院へ來て居た。三月の十日である。櫻の盛りで、丁度天氣も晴れて居たから、佛の極樂とも餘り違はぬやうに想像されて、佛緣の無いものまでが涙を流して佛の難有さを思ふやうな有樣であつた。大勢の僧の講演する聲が一緒に集る時、莊嚴な中に何とも云ひやうのない淋しさ心細さが紫の君に感ぜられる

のであつた。明石の君に、

レ惜しからぬ命ながら、法説き給ふ尊き聲も、これを今生の終りの数へ

と聞く心地は悲しく候。

と書いた手紙を、三の宮にお持たせして遣つた。

心細きさまをのたまはすこと、常の賢き君とも覺え候はず。尊き法

の恵み得給ふは今日を初めと致して行末長き御事ぞと思ひ上げら

れ候を。

こんな返事を明石の君から書いて來た。經の聲と鼓の音とが夜通し

絶えず優な合奏の響を立てて居た。ほのぼのといろいろの花が霞の

中から姿を出す朝ぼらけの景色は、春に持つ誰の執著をも深くさせる

ものと思はれた。陵王の舞の末の樂が破になつて賑はしい時に、舞手

が來賓の貴紳の脱いで與へる衣服を山のやうに前にした光景も面白

かつた。親王達も高官達も嗜みのある程の人は皆舞に樂に手並を見

せて人を喜ばせるのに後れまいとして居るので、其面白さは盡きぬも

のであつた。こんな催事も今日が限りになるのであらうと思はれる

紫の君には、皆が皆身にしむ哀愁を伴はぬものはない。昨日一日つと

めて起きて居た其疲れで今朝は横になつた儘で動かれない。

御簾の中から見える來賓のごの顔もごの顔も、これが見納めかと思ふ

と懐しい氣がして、じつと見入れられるのであつた。まして源氏の君

の愛する人である二個の女性に對しては、長い年月同情し合つた交際

ぶりをしながらも、その下には負けたくないと云ふ我慢が流れて居た

ので、もう自分の命の終りが近づいたと思ふ紫の君の感情はさまざま

に動く。誰も千年の命を持つ人のないのは知れて居るが、其中で自分

一人が消え去つてしまふと云ふことは淺くもない悲哀である。併し

いよいよ法會の後の饗宴も濟んで、この人達の歸らうとするのを見る

と、永久の別れの心持がして泣かれるのであつた。花散里の君に、

何時迄あると云ふことを餘りあからさまに自ら知れる哀れなる命ながら、なほ後ち長く情變らせ給ふなと望まれ候は、御佛の力により て見るべき來世を賴めばに候。忘れさせ給ふな。あなかしこ。

こんなことを書いて送つた。

悲しき御言葉、かしこげに打ち消しまつり候はんや。必ず必ず來世も姉妹と賴みまゐらすわが一つの願ひを佛はかなへさせ給はるべく候。御かへしまで。

優しい氣質の女は涙を零しながらこんな返事を書いて居た。いろいろの祈禱が休みなしに六條院で行はれた。この夏には時々のはげしい暑さのために、もう危いやうになることも度々紫の君にあつた。唯だ衰弱が烈しいだけで病苦と云つてはそれ程にないらしいのであるが、まだ美くしさの少しも滅らない人の、どうしても賴みなさうな命を女達は歎き合つて居た。中宮が宮中から出ておいでになることに

なつた。東座敷の方にお落著きになるのであつたが、一先づ紫の君の方へお入りになつたから、お送りの役人の饗應などが此方であつた。名だけ云つて各々の對面の代りにその讀上げる名を聞いて、誰が居る、彼も來たと紫の君は人懷しい心が動くのであつた。中宮と久々の話をしめやかに紫の君のして居る時に源氏の君が入つてお出でになつた。

『今夜は私が獨身者になつたわけですね。氣の毒ぢやありませんか。だから何處かで寢てくることにします。』

紫の君の起きて居る姿を御覽になると、お嬉しさにふとこんな輕い口もおききになるのであつた。源氏の君は外の座敷の方へお出でになつた。

『あなたは彼方の座敷の方へ行つておしまひになると、お逢ひしたくても、お出でを願ふのは勿體ないことだし、私もこんな身體でお話に

行くことも出來ませんから、まあ暫くでも長く此處に居て下さいな。』

紫の君は中宮をお引き留めして居た。中宮は暫くは此儘此方に居らるることになつた。そのうちに明石の君も來たりなどした。紫の君は中宮に殘して置きたい遺言もあるのであるが賢がるやうに思はれるのが恥しくて、さうとも云はないみ難ないことなどをほのめかすのが却て深く中宮のお身には沁むやうに思はれるのであつた。頼りなげな心はいちじるしく紫の君に見える。宮樣達を眺めて、

『皆の宮樣の大きくおなりになるのを見られないのが悲しいと思ふのは、やつぱり私は死ぬのを厭がつて居ることなんでせうか。』

と涙ぐむで云つて居る顔が美くしい。こんなにまで心細く思ふのであらうかと思つて中宮はお泣きになつた。それから、これも外の話の序でのやうにして、女達の中の誰彼の名をさして、

『私がひよつと亡くなりましたら、あなた目を懸けてやつて下さい。』

とこんなことを頼んで居た。祈禱がまた初まる日になつたので中宮は東座敷の方へおいでになつた。御兄弟の中でも最も勝れた愛らしい顔をして何時も來てお出でになる三の宮を、氣分の好い時は前へお呼びして紫の君はお話をするのであつた。

『私が居なくなつたあとで、あなたは思ひ出して下すつて。』

『そんなことを云ふと宮は悲しくつて厭だ。宮は陛下よりも中宮さんよりも母さんが一番好きなんだもの。死ぬのはいやよ。』

とお云ひになつて、零れて出る涙を手でこすつて三の宮はお出でになる。お可愛くお美くしく思はれて紫の君の顔に微笑が上つたが涙はもとより流して居た。

『あなたが大人におなりになつたらね、この座敷にお住みになつてね、あの庭の紅梅と櫻の花の咲く時は特別に可愛がつて大事に眺めて

おやり遊ばせよ。時々は佛樣にも折つて上げて頂戴ね。』

と云ふと宮はお點頭きになつて祖母の顏をじつとお見守りになつた。が、涙が澤山流れ出しさうになるのでそつと立つて外へお出になつた。この宮と女一の宮とをお小さい時から我手でお育てしたのであるから、お行末の見られぬのが紫の君には人知れぬ悲しい事でもあつた。

涼しい秋が來たので、紫の君の病氣は少し好いやうでもあるが、それもはかばかしいものではもとよりない。再發の恐れを毎日のやうに誰も持つた。中宮は宮中へ歸らうとしてお出でになるのであるが長くない命を思はれる自分の傍にもう暫くお出でになつて欲しいと云ひたいのも、亦例の控へ目な心に紫の君は遠慮もされるし、陛下からの間斷ないお迎への使の來るのも知つて居たから何も云はないで居たのであつたが、宮の方から宮中へ入るまで母の傍で暫く居たいとお云ひになつて此方へ移つておいでになつた。紫の君は非常に痩せ細つた

のであるが、これでこそ一層の品と美くしさが添うたとより見られない。昔は餘りに愛嬌が匂ひ過ぎてこの絶世の美も淺はかな花の盛りと同じ位に思はれぬでもなかつたのであつた。そして心に持つた愁に彩られて居る樣子は譬へやうもない崇高な艶めかしい悲しいものと云つて好い。風の凄く吹き出した夕方に、庭の植込を眺めるために起きて脇息にもたれて居る處へ、源氏の君がお出でになつた。

『中宮さんと一緒に居る時は嘘のやうに元氣が出るね。』

これだけのことも源氏の君の嬉しさうにお言ひになるのを見ると、自分が亡くなつた刹那には、どんなにこのお心が騷ぐであらうと紫の君はおいたはしく思はずには居られなかつた。

『私をいいやうに御覽になると云ふこともはかない短い間のことですよ。とてもあなたに安心して頂ける身體に私はなれないのですもの。今にあなたに悲しい目をお見せするのかと思ふと厭ですわ。』

『心細いことばかりを云ふ　眞實にそんな思ひはしたくないね。死ぬ日の來るのが二人一緒だと好いと思ふ。』

涙を紛すこともお出來にならず、泣きながら源氏の君は云つてお出でになつた。

『死ぬと申すことだけは誰だつて逃れられないので御座いますね。』

と宮は悲しさうに云つておいでになつた。美くしい妻と子を御覽になつても、かうして三人が千年も居たいと源氏の君はお思ひになるのであつたが、それればかりはお心にかなふものでないから哀れである。

『宮さん、彼方へお出で遊ばして下さいな。私は苦しくなつて參りましたの。いかに弱つて居る時だと云つても、こんな時に傍にあなたをお置きしておくのは失禮だと思ひますから。』

と云つて紫の君は几帳を前に引いて横になつた。その樣子が平生よりも目立つ心細さの見えるものであつたから、

『ざう遊ばしたので御座います。お母さま。』

と、宮は母君の手を取つて泣く泣く介抱をなさらうとしたが、露の消えるやうな紫の君の命のいまはが來たと見えた。祈禱僧を集める使の騷ぎ、祈りの讀經の聲が六條院の中に湧き返つた。以前こんなことがあつて、それが物怪の仕業であつたためにに祈禱の力で蘇生した。それでこのたびも、夜通し其方の術を爲盡されたが、何の效力もなくて、明方に全く息が絶えてしまつた。中宮もお居合せになつた時に斯うなつたのは深い因緣であるとお思ひになるにつけ、お悲しさも一通りでなかつた。源氏の君は云ふまでもない。一家のうち誰一人氣が確かで居るものもないやうな有樣である。夕霧の君の來て居るのをお呼びになつて、

『もう駄目になつてしまつたのだけれど、尼になりたいと云ひ續けて居たのだから、其儘にしてしまふのは可愛さうだから、せめて今でも

髪を切らせてやりたいと思ふのだが、誰れか坊様は殘つて居るだらうか。もう祈禱が駄目になつたと云つて皆歸つたらうが一人や二人は居るだらう。おまへが坊様を決めて急にその計ひをさせてくれ。』

と源氏の君はお云ひになつた。御自身は威嚴を傷つけない沈著だけは見せておいでになるおつもりらしいのであるが、お顏色も變つてお涙も絶えず頰を傳つて居た。これ程道理きはまる御悲歎はないわけであると、夕霧の君は悲しく思つて見ながら、

『そんなに女王さんが出家をお望みになつたと云ふのは、それも物怪の所作ぢやないかと存せられます。しかし決して惡いことではないので御座いますから、一日半夜でも尼におなりになつた功德はお得になつた事だらうと思ひますが、今になつて髮だけを切つてお上げ申しても、靈魂に何等の慰藉になるのでは御座いませんし、目前の

悲しさが餘計に遺族に加はるばかりでは御座いませんかと私は存じます。』

と夕霧の君は其事をお諫めしてしまつた。忌中に此處で籠らうとする僧の誰彼を呼んで唯死者になすべき最後の儀式を行はしめた、何もかも夕霧の君が主になつて取扱つて居るのである。今迄の十四五年の間疾しい道を外れた望みは持ちもしなかつたのであるが、どうかして昔の野分の日に透見させられた程にでも、よくこの繼母を見る機會と云ふものの欲しいと云ふ願ひは一日とても忘れたことはない。それがほのかな聲一つ聞くことも出來ないで居た間の遣瀨ない苦しさは云ひやうもないものであつた。聲は終生聞く機會を得なかつたが、亡骸にもせよ見ると云ふことの出來るのは、今より外の時にないわけであると思ふと、夕霧の君は冷い涙が流れた。女達が泣き騷いで居るのを、

『少ししづかに、しづかに。』

と、制してものを云ふのに紛らしながら、几帳に手を掛けて中を開けた。夜明の光りがよく届かないので、燈の臺を近く寄せて見ると、紫の君は見飽くことのないまで美くしく清らかなめでたい光りに包まれてゐる顔を、餘りむき出しに男に見せたまま、それを隱さうとも今は思はないらしい。夕霧の君は涙に目も開いて居がたくなつて來るのを、しばただきながら猶ほ見ようとして居る。この美くしい人を生きた儘で自分がかうして見る機會をとらへ得たものとしたら、賢こげな道義心などは心の內に影も留めなくなることであらうと夕霧の君は思つた。長い髮が少しの亂れもなく艷々とした匂やかさは譬へる物もない。灯が明るいのに顏を引き入れようともせず、何心ないやうな寢顏は見ても見ても見放し難い。かう思ふ自身の魂がこの遺骸に入つて生きるのではないかなどとも思はれるのであつた。源氏の君もお心を引き起すやうにして物のお指圖に氣を配つてお出でになるのがお痛はしい限りである。昔の日も妻や愛人の死に逢はなかつた身ではないが、こんな痛切な死別の苦はまだ味つたことがない。恐らくこれから後にもこれに勝つた悲しみは見ることがなからうとお思ひになるのである。其の日に遺骸はもう棺に移された。骸を見つつも慰さめられる術は許されないのである。送葬は限りもない廣い鳥邊野が人や車で埋りきつた程の類のない大きな式になつたが、亡骸は云ひがひもない一筋の煙となつて空に上つただけであつた。雲を踏むやうなお心持で源氏の君は人に扶けられてお出でになつた。來て居る人は其の尊嚴な御身と、明らさまに見られる源氏の君の甚だしいお歎きとを思つて泣かないものはなかつた。心弱いお送りの女達はまして危なく車から落ちさうに思はれた。源氏の君は葵の君をこの野にお送りになつたときの事をお思ひ出しになつて、其の時の悲しさはまだ其程

取亂した心を起させかかつた爲めか、月がはつきり目に見えた御記憶があつた。今夜はそれがよく見えないと引き比べてお思ひになるのであつた。十四日の夜明に紫の君は亡くなつたが、これは十五日の未明のことである。夕霧の君も忌服に籠つて六條院におもに寢起きをして居た。夜も晝も源氏の君のお傍に居て、その深いお歎きに對しお慰さめをするのに骨を折つて居た。野分めいた風の吹く夕方に夕霧の君は昔の事を思ひ出して、ほのかに見ることだけが出來たその時の紫の君の姿を戀しく思ひ、またあの遺骸を見た記憶が夢のやうであると思ふと、堪へ難いほど悲しくなるのを、人目にいぶかしく思はれまいために、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と唱へて涙を紛らして居た。源氏の君は尊い僧達を始終ここにお置きになつて忌中の定つた念佛の外に法華經などを讀ませておいでになつた。入り交る夜の經の聲も哀れを誘ふものの一つであつた。自分は鏡に映る容貌を初めとして、何

事にも他と異つた高い人として作られたのであつたが、佛はまた自分を佛の道に入れるために幼い時からさまざまな悲しさを目に見せた。それでも心強くそしらぬ振りで出家もせずに今日まで過ぐして來たために、佛は最後に大鐵槌を頭上に加へて警へやうも云ひやうもない今度の悲しさを自分に見せ給うたのであらう。しかし、もう心に懸る絆が何一つなくなつたので、今度こそ出家の素願をも遂げたいとお思ひになるが、この涙の乾き切らない間はまだ一切の妄想を捨てて佛に仕へることがむづかしからうともお思はれになる。宮中と上皇の御所とからは形式だけではない懇ろな慰問のお使を度々お遣しになつた。前太政大臣も同情の勝つた人であるから紫の君の死を悼んで度度見舞の手紙や使の人を六條院へ送つた。大臣は妹の葬の君が亡くなつたのも丁度この時節であつたと思ひ出して、その時その人を惜んだ人の多くが今は故人になつたのを思つて、遲速があるばりで誰も皆

死ぬる命を持つて居るのであると身に沁んで感せられる夕方に子の
藏人少將を使にして、何かとこまごま書いた後に、

いにしへの秋さへ今のここちして悲しきことの二つ重なる

こんな歌を附けた手紙を源氏の君に奉つた。大臣の思ひは直ちに源
氏の君のお心に響いて、其秋其日に別れた昔の妻をも戀しくお思はせ
した。

かなしさの昔と今と分けもえず秋は男にいとつらくして

これは源氏の君の御返歌であつた。其秋の薄墨色よりはやや濃い喪
服を著ておいでになるのである。幸運の子として作られた人でも、人
に嫉まれ、また自身の驕り心から人に苦しい思ひをさせるのが習ひで
あるが、故人の紫の君にはそんな缺點は少しもなかつた。世間の賞め
者で、ゆかしい女性として渴仰の的になつて居たので、この人を思ひ出
す純な感情から、蟲の聲や、風の音につけても涙を落さない人は全くな

いと云つて好い秋である。冷泉院の皇后宮からもよくお尋ねの文が
來る。

枯れはつる日の野邊を憂しと、今日のさまはるかに知り居給ひし深
き御心より、亡き君は秋を疎ましく思ひ給ひしに候ふらむ。やうや
く斯く思ひ知り候。

この后の宮のお文を、悲しいお心地の中にも繰返し繰返し源氏の君は
眺めておいでになつた。高い趣味を知つた女の友としてはまだこの
宮お一人が世にあるとお知りになつたのが嬉しいのであるが、やはり
前からの續きの涙が意地悪く零れるのであつた。夕霧の君は四十九
日の法會の仕度にかかつて居た。中宮などもお忘れになることの出
來ない悲しさを負つておいでになる有樣である。

まぼろし

正月が來て何物も色めくのを御覽になると、源氏の君のお心には一層暗い悲しみが湧こるのであつた。年賀の客は例年に變らず出て來るが、病氣のやうにお繕はせになつて源氏の君は誰にも逢つて見ようとはなさらなかつた。兵部卿の宮のおいでになつた時には居間の方でお話をしようとお云ひになつた。

いつしかと梅は咲けどもわが家の春の佐保姫行方しらずも

これは其時源氏の君が宮にお見せになつた歌である。女達も紫の君に長く使はれて居た者は、皆春になつてもまだ濃い色の喪服を脫がな

いで居る。其等の人は源氏の君が誰の御殿へもお出でにならずに、何時も此處においでになるのを淋しい悲しい中の賴みともして居るらしい。中には源氏の君と主從の關係以外の關係のある女などもまじつてゐたが、其人等へも源氏の君はさつぱりとした素振を見せておいでになつた。夜も誰彼と幾人もお寢床に近い處へ話の伽におき置きになるのであつた。聖人のやうな生活に一歩一歩入つてお行きになるにつけて、亡き人と御自身との戀が斯うまで眞面目なものであることは昔も變りのない眞實であつたが、ありのすさびに過ぎない戀の戯れで其人に多く恨まれたと云ふことをつくづくとお感じになる。其時の御自身の仕業も後悔されることは云ふ迄もないが、其人はしないでも好い取越苦勞を、ご の女のご の場合にも一度づつ深く深くする人であつたなどともお思ひになつた。そんな場合を知つて、紫の君に同情して居た女達は、そんな話をそれとなく持ち出しなどもするので

あつた。女三の宮の入嫁して來られた頃、その時の紫の君はまた心の煩悶を少しも外へ出さなかつたが、何かのことに觸れて味氣ない日が來たと心に思ふ風情の見えたのが哀れであつた中にも、雪の降つた夜明に歸つて來た自分の心も悲しさに氷るやうであつたが、其人は大やうにして居て恨みがましいことは云はなかつた。それで居て著物の袖が涙に濡れて居たのを、隱さう隱さうと紛らして居たあのゆかしい妻を、もう自分は永遠に見ることの出來ない他界の人にしてしまつたのであると、こんなことを夜の明けるまで思ひ續けておいでになつた。朝になつて部屋へ歸つて行く女であらう、

『ひどい雪だこと。』

などと廊下で云つて居るのがある。昔の雪の夜明が今の事とより思はれない。戀しい人だけが唯お傍には居なかつた。熱いお涙が零れた。氣紛しに早くお起きになつて手水をお使ひになつた。前夜に埋

めて置いた火を直した桐火鉢を女達が持つて來る。中納言の君、中將の君などと云ふ人等がお傍に來て居た。

『昨夜はなんだか格別淋しかつた。併し斯うした坊樣らしい生活もすれば出來るものだね。何だか今迄のことが莫迦なやうにも思はれる。』

などと源氏の君は云つておいでになつた朝とか、淋しくお思ひになる夕

『眞實はもう坊樣になつても好いのだがね、おまへ達が一厨淋しいことになると思ふと氣の毒だ。』

源氏の君はそれから經を低い聲で讀んで見たりなどしておいでになつた。こんな風にお歎き明しになつた朝とか、淋しくお思ひになる夕方などには、紫の君の特に愛して居た女達を傍へ置いて話をなさるのがお慰みであつた。中將と云ふのはまだ小い童女の時分から紫の君に使はれて居た女である。源氏の君はこの人を何時の間にか情人に

しておいでになつて居たが、女は女主人に濟まないことに思つて、源氏の君を避ける樣にして愛に馴れまいとする風であつた。紫の君の死後はさう云ふことも皆忘れてお了ひになつて、唯だ故人が非常に愛して居た女と云ふ深く懷しみを持つてこの女を見て居られるばかりであつた。源氏の君は斯うして女達の爲に淡い曖昧を保つて居る家の奥にばかりお籠りになつて、伺候する人に顏をお合せになることもなかつた。極く親しい人、弟の宮方とはお逢ひになることはあつても、それも極く稀なことであつた。力の落しやうの甚しい今の自身を人に見せたくないとお思ひになるのが原因であるらしい。夕霧の君とも御簾を隔てでなくてはお話をなさらないのであつた。明石の君、花散里の君の處へおいでになることもないではないが、屹度何かがお悲しみの種になるので、おのづからお足の向かないのも道理である。中宮を宮中へお入れになつて、三の宮だけをお淋しい慰めに六條院へお置

きになつて居た。

『母さんがさう云つたから。』

と宮はお云ひになつて、西座敷の前の紅梅を保護する責任があるやうに、其木をよくお見廻りになるのを、哀れなことに源氏の君は思つておいでになつた。二月になつた。花の盛りに其木に來た鶯は花やかな聲を立てるのであつた。何事にも胸苦しいお思ひの離れがたないにつけ、鳥の聲も聞くことのない程の深い山住居などがお心に描かれるのである。山吹の花の眞盛りに一重櫻が咲いて散り、八重櫻の後から樺櫻も咲いた。

『宮の櫻が咲いた、咲いた。』

と三の宮はお悦びになつた。

『あの木を四方から几帳で圍つて置いたら好い、そしたら風が來ないから、花が散らないでいい。』

『さうね。大きな袖が欲しい、それで覆うてやりたいなどと云つた歌人よりもあなたの方が分別者だ。』

と源氏の君は笑つておいでになつた。美くしい幼い親王が何よりの源氏の君の御慰藉である。

『あなたと斯うして居るのももう暫くの間だ。死ぬのぢやなくつても、私はもうこの家に居ないことになるだらうから。』

と云つて、源氏の君はお涙ぐみになつた。それを見て、

『母さまもそんなことを宮に云つていらつしつたのですもの、宮は悲しくなりますから、もうそんな事を云はないでねえ。』

とお云ひになつて三の宮は心配らしいお顏で、涙の零れさうなのを紛らすために、源氏の君のお召物の端を手でいぢつておいでになつた。

勾欄にお倚りかかりになつた源氏の君は、前の庭を眺めたり、座敷の中を見廻したりしておいでになる。女達の中には喪の裝ひをした者が

多い。さうでないのも華美な姿をした者はない。御自身も墨染はもうお著けにならないが、わざと無紋の直衣を著ておいでになる。座敷のしつらひの物も淋しい色ばかりが使はれてゐる。心細い遣瀬ないお心持で源氏の君はおいでになつた。女三の宮のお處へでも行つて見ようとお思ひになつて源氏の君はお立ちになつたが、宮も人に抱かれて隨いておいでになつた。そして宮の若樣と一緒にお遊びになるのであつた。女宮は佛前で經を讀んでおいでになつた。何程の信仰があつて入道した人でもなかつたのが專念に佛に仕へて居られる今の尼振は、絆を斷ち煩つて今日に至つたと思つておいでになる源氏の君にそぞろに羨しいと云ふ感をもお與へになるのであつた。佛前の櫻に美くしい夕日が射したのを御覽になつて、

『春の好きだつた女王が死んでから、私は櫻が厭なものに見えて仕方がなかつたのだが、かうして佛に上げてあるのを見ると、やつぱり好い氣持がする。彼方の山吹が隨分見事に咲いて居ますよ、植ゑた人も居ない春だのに。』

と源氏の君は宮にお云ひになつた。

『花が咲いても散つても此方は氣にならない境遇ですわ。』

返辭のしやうもおありにならうに、かう宮はお云ひになつた。源氏の君のお心は、また新に、子供の時から死ぬ日まで相手にしがひのある人であつた物を言つても飽き足りなく思ふ樣なことの一度もなかつた人であつたと紫の君がお忍ばれになつた。夕方の霞の面白くたなびいた景色に促されて明石の君の處へお廻りになつた。お出でになることが久しくなかつたので、不意のことに驚きながらもこの賢しい人は見苦しくなく其場を繕つてお迎へした。誰にも勝つた氣の利いた嬉しい女だとお思ひになりながら、亡くなつた人はかうでもなかつたと、何事にも品の備つてゐた紫の君が堪へ難いまで戀しくおなりにな

るのである。どうすれば何處へ行けば慰められる心かと、我ながら深い戀の執着を苦しくお思ひになるのであつた。此處では過ぎ去つた日の話などを打ち解けてしておいでになつた。

『情の力に支配されて覺めることの出來ない人になつてはならない と昔は自分の心に程を附けて居たから、中頃に逆境に立つた時も雲水に身を任せて何處の野で倒れ死をしても別段心殘りがないと思はれたのだけれど、其うちにいろんな關係が生じて情の鎖を切ることの出來ない囚はれ人になつたから、まだ今日になつて出家もよう遂げないで居る哀れな悲しい私だ。』

滅入つておいでになる心を斯う說明して源氏の君はお聞かせになるのであつた。併しお心の大きい傷の痕が外からも餘りによく見えるのをお氣の毒にも悲しくも明石の君は思つて居た。

『御出家遊ばす事などでそんなに思召さないでも宜しいでは御座いませんか。人目には何の繫累もなくて何時でも出家の出來さうな方でも、矢張そのお心に入つて見ますとさうも出來ないことがあるもので御座いませう。それにあなた樣などはそんな事をさう輕々しく遊ばして好い御身分でも御座いません。早い方が好いとも遲く道に入つたが好いとも決つた事ではないでは御座いませんか。早くて淺い事になりますより、遲くて深い方をおとり遊ばす方が宜しいやうに心得ます。唯今のお悲しみの心からの御出家の思召などは、まあ紛らしてお忘れ遊ばして宮樣方も今少し皆樣御成人遊ばすのを御覽になつた上で遊ばす方が眞實では御座いませんでせうか。』

忠實にこんなことを云ふ女を源氏の君は惡くはお思ひにならないのであつた。

『そんなにまで欲深い事を望んだ上で入る深い信仰は、さうでもない

時の淺い信仰より價値がなささうに思はれるよ。』

などと云つておいでになつた。そして、

『私は女院がおかくれになつた春には、花も黒く咲いて欲しいと思ふ程の悲哀が心の底から湧いたね。それと云ふのは立派な方だと小さい時から心に沁んで崇拝して居たものだから、お死になつた云ふ事が唯無暗に悲しく思はれたのだね。亡くなつた女王も若い子供の時から傍に置いて自分が一人前の女にしたのでもあるし、その長い間の馴染心と云ふものがあつて、こんな年寄つた末にひよつくり一人になつたのを悲しくてならなく私を思はせるのだよ。かう云ふ時の感情はその人に對する戀の深い淺いにはかゝはらないものだと思ふよ。』

とも云つておいでになつた。話に夜を遲くまでお更しになつて泊つても好いわけであるがとお思ひになりながらお歸りになつた。御自

身ながらも不思議な人になつたとお思ひになるのである。女は寒い思ひをせぬでもなかつた。

泣く泣く歸り來り候ひしかな。假の世は何處がわがためのうらやすの眠りの床とも定められぬを忘れしやうに。許し給へ、哀れなる喪心者を。

翌朝早くこのお手紙を見た女は夜通し思つた恨めしさも忘れて涙ぐんで居た。花散里の君の方から四月一日の更衣の御衣服を新しく揃へて持たせて來た。

おん袖にまことは君の御心に今日だにせめて涙流すなこんな歌が添へてあつた。葵祭も來た、花やかな加茂の社前の見物人をお思ひやりになつて女達に、

『おまへ達も今日はかうして家に居るのはもの足りないだらうから、實家へ一日行くことにして見物に出ておいでよ。』

と云つておいでになつた。中將の君のうたた寢した東向の座敷にお歩み寄りになると、小柄な姿の好い女は起き上つた。少し赤くなつた顏を見られないやうにとして居る。亂れてふくれた髮の掛りやうも美くしい。黃な色の交つた紅の袴に鈍色や黑を重ねて居る。唐衣や裳の脫いであつたのを著けたりする傍に葵の葉が置かれてあつた。

『葵(逢ふ日)などと云ふ言葉も忘れた。』

『眞實に上樣は忘れておしまひ遊ばしましたわ。』

女は恥らひながらかう云つた。さう思うであらうと哀れにお思ひになつて、

『眞實は忘れないよ。外の草も木も厭になつたのだけれど、此草だけ。』

と源氏の君はお云ひになつた。やはり聖人ではおありにならなかつた。降り暮す梅雨の頃源氏の君のお物思ひも其通りに絕間なしにお心を暗くするばかりであつたが、十三四日目に不思議に晴れた夜が來

て月影も珍らしく見られた。お側には夕霧の君が來て居て、橘の匂ひが花やかに漂つて居た。杜鵑が鳴きさうに思はれて誰も待つて居るうちに俄に雲が出て凄じい降になつて來た。さつと來る風に燈籠の灯も消されてしまつた。

『一人で居るのだから、何時も同じやうな淋しい心持のあるのは其譯だが、梅雨の間は格別淋しく思はれるよ。山奥の寺へ入る時の下地を拵へて置くことになつて好いかも知れないけれど。』

こんなことをお云ひになつて、それから女達に、

『何かおまへ達の方で菓子を見繕つて大將にお出し、男共を呼んで云ひつけるのも大層になるから。』

などと云つて氣を配つておいでになつた。それで居て、お心の中に冷いお悲しみの流れが銀のやうな色をして通つて居るのがお見えになる。こんな事では出家をなさつても專念の佛仕へはお出來にならな

いであらうと夕霧の君は氣の毒に思つて居た。ほのかに唯見ただけの自分でさへ其人の事が忘れられないのであるから、ましてお道理であるとも思つた。

『まだ昨日今日のやうに存じますが、女王樣の一週忌も近くなつて參つたので御座いますね。法事はどう云ふ風になさいますか。何かお考が御座いますか。』

『別にどうつて思つて居はしない。世間並の事でいいさ。極樂の曼陀羅を女王が拵へさせて置いたのがあるから、それの供養を一緒にでもしようか。』

『そんな事もしてお置きになつたので御座いますか。それにしても一人でも形見になる人を殘して置いて下すつたならと殘念に存じますね。』

『それはね、つまり私に子が少いのだから仕方がない。長生をして居

る外の者にだつて子はさう生ませて居ないのだからね。まあおまへの所で子孫は殖して貰はう。』

源氏の君はこんなことを云つて、悲しみを更に深くするやうな話は避けておいでになる。杜鵑が啼いたので、

『雨中の杜鵑だね。私の涙の中の杜鵑だ。』

とお云ひになつた。夕霧の君は其晩お傍に泊つた。お獨臥のお氣の毒さにをりをりこんなことがあるのである。紫の君の在世の時は遙かな世界のやうに思はせられて居た。暑い間は池の傍の座敷で源氏の君は起臥しておいでになつた。蜩蟬の聲の花やかな下に撫子のいろいろと交つて咲いた美くしい夏の夕の景色も一人で御覽になるのは味氣なかつた。七夕も例年のやうではなく、誰れ一人空を覗いて見る者も六條院にはなかつた。八月の月初めからは法事の用意に紛らされて源氏の君もお暮しにな

つた。一週忌の日には曼陀羅の供養があつた。其頃中將の君の持つて居る扇に、

君戀ふる涙果てなしこの日をば喪に居るはてとおきてらるれど

と書いてあるのを源氏の君は御覽になつた。冷い九月、十月はましては源氏の君に痛ましい目ばかりを見せた。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂のありか尋ねよ

其頃のお歌である。五節などで世間の騷ぐ日も淋しいがちである六條院へ、夕霧の君の子が二人初めて宮中へ出たと云つて母方の頭中將藏人少將 ごと云ふ二人の叔父が附き添つて來た。物思の何一つ無いやうな若い顏ばかりを御覽になつて、さすがに五節の君を初めてこの日の舞姫で見た夜の事などがお心に浮んだ。今年はかうして忍んでお暮しになるのであるから、もう來年は出家しても世間から兎角の評を招くこともあるまいと源氏の君はお思ひになつて、やうやくそん

な心構へもおしになるのであつた。女達などにも程々に財物を分けてお遣りになつた。そして何故にとはお云ひにならないのであつたが、女達には御本意のある處がお察しせられるので、限りもない悲しい事が來ると思つて歎いて居た。女の手紙を昔から時々にお破り捨てになつたが、皆迄は惜しいと云ふやうなお心から少しだけ殘しておいでになつて居たのを、片附けものをする時にお目に附いてお破りになる中に、須磨にお出でになつた頃方々からお受取りになつたのも混つて居る。紫の君からのは束にしてあつた。御自身がしてお置きになつたのであるが、其れが一世を隔てたものの如くにお思はれになる。併し墨の跡は今書いたやうにも見えた。限りなく懷しいこれをも見る日がなくなるのであるとお思ひになりながら、氣の知れた女達二三人をお傍へお呼びになつて、手傳はせて破らせておいでになつた。故人の書いたものを見るのは何でも悲しいのに、書いた人の涙の跡の讀

み難いまでに殘つた手紙に、其時の對手だつた人の二十幾年後の涙も落ち添ふのは是非もないことである。お持ちになつた手紙を源氏の君は堪らないやうにお投げ出しになつた。

『氣が弱くなつたねえ。こんなものを見た位で。』

などと云つておいでになつた。女達も見て居ない風をしながらも、目に入る文章に、この世においでになつた日の御別居にさへもこれ程のことをお書きになるお二人の中なのであるからと、孤獨の主を悲しんで居た。これも同じ空の煙になれと、破つた文をまた燒かせておしまひになつた。十二月の佛名にも、これを聞くのは今年限りであるとお思ひになると、廻つてくる僧達の錫杖の音も哀れにお聞かれになるのであつた。年來のお馴染の僧の何時の間にやら老境に趣いた姿を御覽になつて今更のやうに身に沁むお心地もした。高官も大勢來て居た。宮達もお見えになつた。雪の中の梅の枝がちらほら花を附けた

景色をもてはやして、管絃の遊びなどをしたいと人々は思つたけれど、まだ琴の音も琵琶の響も咽泣の聲を聞くやうに源氏の君は思つておいでになるので酒宴の席上では唯だ歌がうたひ合はれただけであつた。併し久し振りで皆にお逢ひになつたので昔にも勝つたお美くしさの輝くやうなお顏を見ては老僧達迄が涙を零して悦んだ。三の宮が歲暮の追儺に皆を驚かすやうなことをするのだと大騷ぎしておいでになるのを可愛く思つて御覽になりながら、それらの人に別れの日の近づいて來るのをお思ひになると忍び難いお思ひもされるのであつた。

物思ふと過ぐる月日は知らぬ間に年もわが世も今日や盡きぬる

こんな歌もお詠みになつた。元日の用意を例年よりも華美やかにさせておいでになつた。親王達や高官達への贈物なども美々しく調へられてあつた。

源氏の君がお薨れになつてから、風流男、華奢男の光源氏の後繼者と見るやうな人は血緣の人々の中にも求め難かつた。冷泉院の上皇は美男とおはやされになるのには餘りに尊嚴なお身にあらせられる。今上の三の宮とその同じ六條院で成人した朱雀院の女三の宮の若樣と、この二人がとりどりに名高い若人であつたことは、美男であり、風流男であると云ふことに違ひはないのであつたが、それは唯世間並と比べてのことで、源氏の君の若盛りの美の權威が再現されて居るのではゆめにもない。唯源氏の君のお孫宮御實子と云ふ他の思ひなしと、權

匂宮

力の大きさに立てて置かれる美男とも云つて好い。それぱかりは祖父君にも父君にも勝つた圓滿な運命の手に居る人等と云つても好いのである。紫の君が別してお愛しして居た由緣で三の宮は二條院に住んでおいでになるのである。一の宮の東宮のお大事であらせられるのは別として、陛下も中宮もこの三の宮を非常にお愛しになつて居るのであるから、常に宮中にお置きにならうとされるのであつたが宮はやはり心安い二條院の方を住みよく思つておいでになつた。元服をしてからは兵部卿の宮と申し上げるのであつた。女一の宮は六條院の南の家の東御殿を昔の儘のしつらひでお住居になつて居る。そして朝夕に祖父母を戀しく思ひ出しておいでになつた。二の宮も同じ處の正殿を時時の御休息所に當られて、宮中では梅壺を使つておいでになる。宮は右大臣である夕霧の君の二番目の姫樣を夫人にして居られるのである。この次の東宮に當然おなりになる方として御勢

力も強く御人格も立派な方であつた。夕霧の君は女の子を澤山持つて居た。上の姫樣は東宮の女御になつて居て競爭者も一寸出て來られないやうな好い羽振であつた、その次々の姫樣は一人づつ次々の宮樣の配遇になることであらうと世間でも云ひ、中宮もさうなることを御希望になつて居たが兵部卿の宮だけはさうしようと素直にお思ひになることは出來なかつた。自身の心から起こつた戀愛で成り立つた夫婦でなければならないと云ふお考へがあるのである。夕霧の君は餘り續いて同じな緣組ばかり女にさせておくことも望みでないと云ふやうにして居たが、また宮の方から御所望になるならお斷りはしないと云ふ風も無論見せて居た。そして兵部卿の宮をおいたはりして親切な心をお見せして居た。其人の六人目の姫樣が其頃思ひ上つた親王達や高官等の戀の目標になつて居た。源氏の君のお薨れになつた跡では、六條院や東の院などにお置きになつた女性の誰も泣く

泣く自身の家と決めた處へ移つて行つた。花散里の君と云つた人は東の院を御遺産の一つとして分けられたのであつたから其處に住んで居た。女三の尼宮は朱雀院からお分たれになつた三條の宮においでになる。中宮は宮中を餘りお出にならないから、六條院は淋しく人少なになつて居るのを夕霧の君は今まで人の上で見た生きてた間一代の榮華の家が影もない淋いしものになつて殘されて居るのは故人のために見よくないことであると思つて、せめて自分の居る間だけでも六條院は昔に變らない花々しい處として置きたい、附近の街の人影の見えることの少いやうなことはさせたくないと思つて、紫の君の居た御殿へ一條の女二の宮をお移らせして、雲井の雁の君の居る三條の家と一夜おきに月十五日づつ來て泊つて居た。二條院と云つて作り磨かれ、六條院の春の御殿が地上にまたとない歡樂の家に形づくられたのも、皆一人の女の末の幸福を見る器に過ぎなかつたのか明石の君

は多くの宮方のお世話をしながら、この一族の大母の如き有樣で居た。夕霧の君は源氏の君の妻であつた人として、花散里の君にも明石の君にも變らぬ母としての尊敬を盡してもてなして居たが、紫の女王が斯うしてやもめになつて殘つたのであつたなら、どんなに母として自分は自己を傾倒して仕へたかも知れない。一生その人は自分の志らしい志を見知らないで死んだと思ふと何時も殘念でならないのは此事であつた。天下の何人も源氏の君を戀ひ慕はない人はない。何事につけても火の消えた樣に思はれると云ふ歎きを皆がして居た。まして一家の人人は、連れ添つて居られた人人お孫の宮達からはじめ、こぞつて源氏の君のおいでにならない甚しい悲しみをして居る外に紫の君を思ひ出さぬ時もなかつた。二品の宮の若樣の薫の君は源氏の君のお託しになつた通りに冷泉院の上皇が特に大切にしてお愛しになつて居た。皇后宮も皇子などのおありにならないお心細い思ひもあ

つて、この人の世話をおやきになるのを嬉しくお思ひになるのである
から、何かと心を盡して居られた。元服も冷泉院で行はれた。十四の
年である。その二月に侍從に任官した。秋にはもう右近の中將にな
つて位階もまた一級進んだ。院はおいでになる御殿に近い一つの御
殿をこの人の居所におさせになるのにつけても、其處の間の中の飾り
をいろいろ御自身でお指圖にもなつた。薫の君附の女達には院のお
使ひになつて居る中からも、皇后宮附の中からも、容貌の好いのばかり
を選つてお決めになつた。此處が氣に入つた處になれとばかり何か
につけて計つておいでになつた。それがまた院にはお樂みのやうで
もあつた。弘徽殿の女御と云つた人が唯一人お持ちして居る姫宮を、
院がお愛しになるのにも劣らない有樣である。これは院と皇后宮と
の御中がますます圓滿になつて行くことが證されて居るやうなもの
と云つて好い。女三の尼宮は唯佛勤めを靜かにおしになつて、例月の

念佛、年二度の法華經の八講、その外の佛のためのお催しばかりがお
しごとで、淋しく暮しておいでになるから、薫の君の出入りするのを、却つ
て親を見るやうに慕つて賴みにしておいでになるのが、薫の君にはお
氣の毒に思はれて、宮のお傍に多くお居てお上げしたい心にもなるので
あるが、院も陛下も自分を少しでも傍へ置かうとされるのであるし、東
宮もその弟の宮方も御幼少からの遊び友達であらせられるので、彼方
でも此方でもお懷しがりになつてお離しにならない。それでまだう
ら若い公子は我身を幾つにも分けて多くの目上に滿足をおさせした
いと氣が揉まれるのであつた。幼い日からの心持に不思議極る源氏
の君の涙を見た記憶が殘つて居たり、折折謎のやうな言葉をわが上に
ついて云はれたことも知つて居たり、自分が生れるについてどんな複
雜な背景があつたのかとこんな疑ひを持たないわけには行かなかつ
た。宮には自分がこれを覺つて居るとはお知らせしたくない。其時

の悲劇の女主人公その人には罪はもう消滅したものとお思はせして置きたい。併し自分はそれで滿足はして居られないのである。眞相が知りたい。知りたいが捜る絲口もない。

おぼつかな誰に問はましいかにして初めもはても知らぬわが身ぞ

こんな歌を詠んだこともあつた。自分の弱い體質もそんな罪の子が受けた佛の罰かなどと病氣をする時などには思ひもした。宮がまだ盛のお年で、自分から見ても確かな道心のあるでもない方が、俄に尼になられたと云ふのは、その自分の生れた當時には必ず秘密がお身にまつはつて居て、それにお苦められばになつての結果だと見るのは間違はぬ眞實であるらしい。他の人の中に氣附かれずに居るわけはない。よくないこととして自分には誰も誰も聞かすまいとして居ることがあるに違ひないと思ふ。宮は明暮佛勤めをして居られるけれども何

程の自覺も徹底した信仰もおありでありさうにないのであるから、來世の贖罪もおぼつかないと云はねばならない。せめて自分の力でそれがおさせしたい、宮の來世をせめて幸福であらしめたいために、子の自分が眞の信仰に入つて僧にもならうと薫の君は思つて居るのであつた。お薨れになつた源氏の君も、自分のために清いお思ひの中に時時はお悶えの交つたこともあつたであらうと思ふと、其方にも是非來世でもう一度お逢ひしてお詫びをしたい心も起つた。いよいよ道心が進んで、元服をすることなども初めは承知しなかつたのであつたが、意志を立て通すことも出來ないでそれも濟したあとは唯外面から受ける好意で花やかな人らしく見なされて居た。陛下も母方のお伯父としても愛を厚くおかけになつた。中宮ももとより數少い中の御弟であつて、殊に源氏の君が末に生れた不幸な子であるから、成人の日を見て安心をすることも出來ないで別れるとお云ひになつた悲しいこと

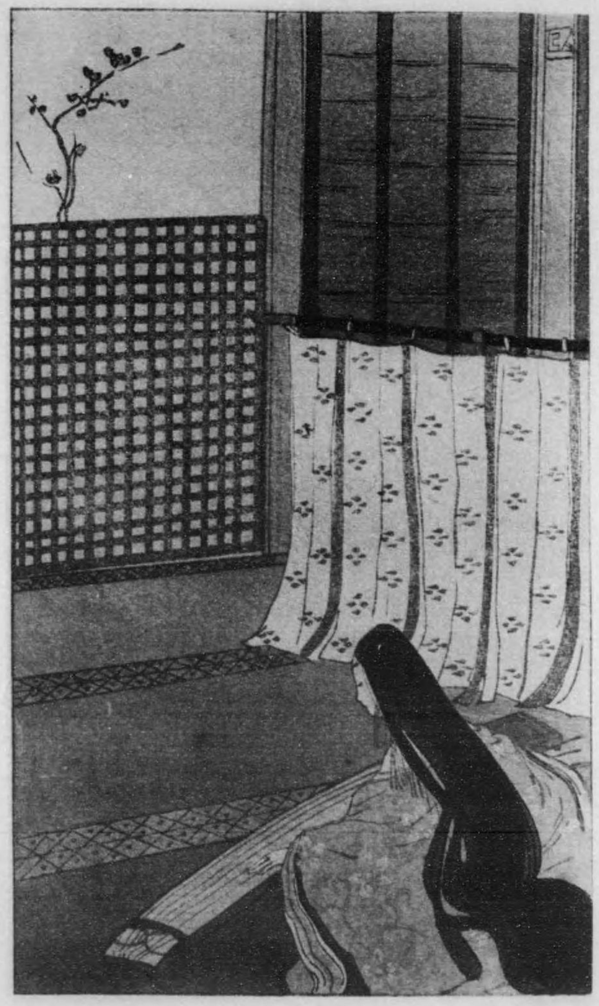
が始終お思はれになつて、心の中では子とも思つてお出でになるのである。夕霧の君もまた自身の子よりも薫の君の方を大切に思つて、氣を附けるだけ氣をつけて、年のちがつた弟を愛して居た。昔の光源氏は陛下のまたとない御秘藏子でおありになつたが、一方では嫉む人をお持ちになり、また母方の勢力の微弱でおありになつたために百難におありになつた。併し其人格の勝れておいでになつたために、勝ちになり、佛へする後世の勤め迄も立派にお果しになつてお薨れになつた。其子の薫の君は今から年に過ぎた勢望を得て居て、自尊心の旺んなことは若者の中に稀な人と云つて好い。それと云ふのも佛の功德が集つて生れた人であるからと人は思つて居た。誠に佛の化身であるのかと思はれるやうなことも多かつた。容貌は何處と取り立てて美くしいと云ふ質ではないが、唯何とも知れない艶に品の好い、人柄のゆかしさの深く見える處などが萬人に勝れて居た。其體にはまた香ばしい好い薫りが不思議に附いて居た。やや遠く隔つた處へもこの人の追風は薫つて行くやうであつた。それは貴公子として固より身の嗜みに香を用ゐないではないが、香は却てこの人によつて匂ひが加へられて居る場合が多かつた。こんな薫りを持つたことを羨しくお思ひになつたのは兵部卿の宮であつた。宮はまた明暮衣服にお焚染めになる香のさまざまを合すのに骨をお折りになつて、花と云へば、春は梅、秋は菊、藤袴などの香の高いものばかりを好んで庭にお植ゑさせになり、香の人と云ふことを標榜しておいでになつた。こんな方であるから少しお道樂に傾き過ぎたと云ふ批評も自然お受けになることになつた。源中將の薫の君はこの宮とは殊に親しくお交際をして居て、管絃のお遊などにも好いお相手であつた。世間と云ふ多辯な蔭口者は匂の兵部卿、薫中將と對にして並て云ふのであつた。この頃好い女を持つた親達はこの二人の君達を誘ひ寄せたい爲にわが女

のことを其接近者に吹聴させたりもした。宮は悪くない見込のある女達には随分手紙もお送りになつた。併し熱心に戀を遂げようとされる程の人も今迄にはないやうであつた。冷泉院の女一の宮と結婚が出來たならと宮は思つてお出でになるのである。母の女御も勝れた人柄と云ふ評判の高い人であるし、その姫宮のお美くしいと云ふ事は誰も云ふことなのである上に、其方へ伺候することもある女達が兵部卿の宮に、目のあたりお見受けした姫宮の御樣子を事に觸れてお耳に入れるので、いよいよ宮はこの戀に憧れておいでになつた。薫の君は世の中をはかないもの、厭はしいものと思ひ込んで居るのであるから、結婚したために心が引かれて出家の望みが遂げにくいことになるのを苦しいことに思つて、そんなことは斷念して居る風に見えた。表立つたことでなくて身に沁む戀もある筈であるが、それも無いのは餘程誘惑に遠い心を持つて居ると見る外はない。十九の年に三位の宰

相になつて猶中將をも兼ねて居た。帝后の寵遇を一身に集めて居る人でありながら、内にある悲みが何時も心を押へてそのために輕卒をせずにすむこともあつたのであらう。浮いた人でないと云ふ事もよく世間では認めて居た。兵部卿の宮の憧れておいでになる姫宮とも同じ院の中に居ては事に觸れて若い心のそそられる思ひもせぬではない。妻を持つならこれ程の方をと思ふのが人間の眞實である。併し子とお思ひになる程のおもてなしではあつても、姫宮との中は隔てるやうに院のお仕向になるのを知つては、あながちに近寄らうとは思はなかつた。戀の心が附いた日は自分も其方も不幸の生涯に入る初めの日であると迄思つた。しかし、薫の君は戀をせられるやうに作られた女は皆戀しがつて進んで情人となつた。通ひ所も一つ二つではないやうになつたが、心から愛して居る女と云つては別にない。も

とより妻にしようなどと思ふのではない。やがて別れた時女の爲に自分とのそれ迄の關係が世間に知れぬやう今から表だたぬ用意もされて居るのであつた。情熱のある女は飽き足りないで女三の尼宮の侍女になつて三條の宮に來て居た。そんなのは決して一人や二人ではない。一家の中に居れば淺くとも永い緣はつながれて居ると思ふのであらう。奉公に出る身分でない者も此處には來て居た。夕霧の君も澤山ある女の子の中の誰かをこの人に婚したい心があるのであつたが、さすがに自身の方から云ひ出すことも出來なかつた。これはまた餘りに內輪同志過ぎた緣組になることを氣附いて居ないではないが、この人を外にして若い人の中に相當するだけの人物のないことを思つては、それが又なく望ましい事になるのであつた。藤典侍の生んだ六の君は姉妹の中に勝れた美くしい娘で、性質にも缺點のない女であつたが、正妻の腹に生れなかつたと云ふことがひけ目になつては

愍然であると思つて、まだ子を一人もお持ちにならない女二の宮のお手許へ引き取つて置いた。六條院に居れば自然兵部卿の宮や薫の君の目に附く機會も多いことと思つて夕霧の君の計つたことでもあつた。華美やかにその女の周圍を繕つて若い男の心を引く工夫が總てし盡されてあつた。正月の宮中の賭弓の後の饗宴を六條院で催して宮達をも御招待しようと夕霧の君はした。其日は元服された親王達が皆御前で勝負を御覽になつた。其の中でも匂の宮のお美くしさは目立つたものであつた。第四の皇子常陸大守の宮と云ふのは更衣腹であらせられる。思ひなしか劣つてお見えになる。例年の決りのやうに左が氣の毒な程勝つのであつた。何時もより早く果てて、乘左大將の夕霧の君は、自身の車へ三の宮常陸の宮中宮腹の五の宮をお乘せして宮中を出ようとした。右中將の薫の君は今日の負方なのであつたから、そつと歸らうとして居るのを、夕霧の君は見て、



『宮様方のお送りに一緒に來てはどう。』

と勸めて、これも伴つて行つた。衞門督權中納言、右大辨などと云ふ息子達、その外の高官達も大勢六條院へ向ふ車に乘つて居た。道を少し遠く行つた頃に雪が降り出して艶なたそがれ時となつた。笛などを面白く吹きながら人人は六條院へ著いた。

紅梅

今の按察大納言である人は、院の弘徽殿の女御の同胞で、柏木の君の次の弟であつた。子供の時から英氣を負つて居た立派な人物で、次第に官等なども陞進して來た。故太政大臣家の正嫡がこの人であるから、用ゐられやうも重く、勢力も侮り難いものであつた。妻は二人あつたが、初めからあつた方のは亡くなつた。今居る夫人と云ふのは、死んだ髯黒の太政大臣の姫樣の眞木柱の君である。祖父の式部卿の宮が源氏の君の弟の兵部卿の宮を婿にお取りになつたその人であるが、婿宮がお亡れになつてからこの大納言の戀人になつたのであつた。再婚

したことは蔭のことであつたが、年月が經つた今では大納言も夫人も
もう世間へ憚つて居るやうなことはない。子は亡くなつた夫人の生
んだ女二人きりであつたのを、物足りなく淋しく思つて神佛に祈らせ
たりなどして居たが、そのうち今の夫人の腹に男一人を設けた。眞木
柱の君は宮の遺子一人を持つて居たが、それは姫樣であつた。繼娘を
も連子の姫樣をも兩親は隔てを置かずに愛して居るのであつたが、雙
方の乳母や女達などが根もないことでいがみ合つたり爭つたりする
ことも時時にないでもないのを、眞木柱の君は快濶な、さつぱりとした
人柄の女であつたから、そんな事も輕い事にして公平に取捌いてしま
ふのが常であつた。親身の姫樣が惡いことにされたりして心の痛ま
すに居ない時でも却て笑つて濟ませて居るので、こんな家庭に有り勝
ちな葛藤も起さないのを世間では賞めて居た。三人の姫樣が略ぼ同
じ程に揃つて大きくなつて來た。裳著なども行はれた。中央の御殿

を大きく廣く間を澤山に分けて作らせて、南側の方を大納言の上、の姫
樣に使はせ、西座敷の方には、妹の姫樣をおいて、宮の姫樣を東に住ませ
て居た。父宮のおいでにならない姫樣は不自由なお氣の毒な身の上、
とも想像されるが、さうでもなく、曾祖父の宮、父宮、祖父の太政大臣など
から分たれた財産が多くて、自身はもとより召使の身のまはりにまで
華美に品の好いこのみを盡して居た。三人も揃つて美くしい姫樣が
居るのであるから、緣組を申込む人が少くないのであつた。陛下から
も東宮からも宮仕をおうながしになつた。中宮が居られる宮中へ今
更上つて競爭の出來るわけでもなし、さうかと云つて自ら卑下した見
すぼらしい女御で置くのも本意でない、東宮には左大臣の夕霧の君の
姫樣が御寵愛のある女御として居るのであるから、それと競爭して行
く事の困難さは同じであるが、さう取越苦勞ばかりをして居て、人並以
上の幸が受け得らるる天分のあると思はれる女に、宮仕と云ふ道を閉

いでしまふやうなことをしてはならないと大納言は思つて、上の姫様を東宮の女御に出すことにした。十七八の、美くしくて愛嬌の多い姫様であつた。次の姫様も年は一つの違ひで、品の好い奥行のある美人であることは姉の姫様よりも勝つて居た。唯の男と結婚させるのは惜しい氣がして、大納言は兵部卿の宮にお上げしたいと望んで居た。匂の宮は大納言の子を宮中でお見かけになりなどする時には何時も傍へお呼びになつて親しい言葉などをおかけになつた。目附額附などに賢さの見える好い人柄の子供である。

『私が云つたと云つてね、弟だけを見て居るのは厭だつて大納言に云つてくれ。』

などと戯談もお云ひになつたのを、若様が家へ歸つて話した時大納言は嬉しさうに微笑んで居た。

『氣ばかりを揉む宮仕をさせるより、好い女を持つたら兵部卿の宮様

を婿にしておかしづきがして見たい。あの方を近い親戚にして見るのは實際嬉しいだらうから。』

などと大納言は夫人に云つて居た。

一方では上の姫様を東宮の女御に上げることに大納言は熱中して居て再現されることなども夢みて居た。藤氏の后が自分の子によつられなかつたため一生悶悶として居た父の太政大臣の靈も慰められる結果が來るかも知れぬと思ふのは嬉しかつた。大納言の姫様の東宮の新女御は淺くない御寵愛があると人が皆云ふ。姫様が宮仕に馴れぬ間の世話は附添つて宮中へ行つても出來ない程に女御を大事にしてあつた姫様達は淋しがつて居るのであつた。西の姫様は大方は一緒に居た姉だつたのであるから、物足りなさを毎日覺えるのも無理ならぬことである。東の姫様も二人とは疎くして居たのではなく、夜分など

は三人が一つの間へ寄つて今迄は寢もしたのであつた。また二つ三つ姉である東の姫樣は今迄稽古事などの場合には二人の師でもあつた。内氣過ぎた人で母とも正面に顏を見合すことの出來ない質であつた。さうかと云つて陰氣な人ではなく、美くしい事なども大納言の子よりは勝れて居た。女御に出したり、妹の姫樣の婿選みをして居ることなどが、親身にばかり盡して居るやうで氣が咎めて、大納言は眞木柱の君に、

『東の姫樣の身の片附を、ごうしようと云ふ思はくがあるなら話してくれないか、私は自分の子と分け隔てをしては決して居ないのだから、父親の出來るだけのことはするのだから。』

と云つたことがあつた。

『そんな事で御心配は遊ばさないでも好いんで御座います。あの人は結婚の出來るやうなはきはきした人ではないので御座いますから、結婚させて苦勞をさせるやうなことになると私等が困ります。親の居ます間は面倒を見て居まして、其後は尼樣にでもなつた方が却て宜しいかと思つて居ます。』

眞木柱の君はかう答へて泣いたのであつた。そして大納言の情を嬉しいと思ふと云つて居た。大納言は實子と同じに思つて居るこの姫樣の顏を未だ見たことのないのを飽き足らず思つて、時時居間をそつと覗くことなどもあつたが、姫樣は不用意な顏の片端も繼父に見せることはなかつた。ある日大納言は、

『母さんの留守の間は私が代りになつて居なければならないんだが、あなたは私を他人らしくするから困つてしまふぢやありませんか。』

と云つて、東の姫樣の居間の御簾の前に座つた。姫樣はほのかな聲で返辭をした。愛らしい容貌の、品のいい美くしさが思ひやられる聲であつた。大納言は自慢に思ふ事もあつた自身の姫樣もこの人と比べ

ては劣つたものかも知れないと思つた。

『忙しいので、あなたの琴の音も私は聞いて居る間が久しくなかつた。西の子は琵琶に熱心になつて居ますが、あなたを學ばうとして居るのだらうけれどまだ物になつて居ない。よく教へてやつて下さい。私は何が出來るのでもないが、以前の藝術の盛んな時代に逢つて來て居るので、音樂も聽く耳だけは拵へましたよ。あなたは餘り彈かないが、時時聞くあの琵琶は昔の黄金時代の藝術の匂ひがすると私は思つて居る。昔の名人の流を傳へて居るのは今では六條院の左大臣だけですよ。薫の中納言兵部卿の宮などは風流男で、前代にも劣らない方方だが、琴にも琵琶にも其音に弱弱しい所があつて、左大臣の技術には及ばないやうです。それにあなたの琴は不思議に左大臣に似て居ますよ。女性の優しい特性も添つて私は非常に好いと敬服して居る。ひとつ何か彈いて聞かせて下さい。』

と大納言は云つた。

『誰か姫樣に琴をお上げなさい。』

女達に命じた。女達は大納言を恥しがつて隱れるやうなことも今では餘りない。唯一人若い身柄の好い娘らしいのが顏だけを見せないで居た。

『姫樣を眞似しておまへ達も私に他人らしい風を見せるのだね。』

などと大納言は戲れて居た。若樣が宮中へ行くので挨拶に來た。美くしいと思つて、大納言は滿足した笑顏で子を見て居るのであつた。

『麗景殿で母樣にね、あなたに任せて安心して居るから、今晩も多分よう行かない事でせう、それに加減も少し惡いからと云ふのを忘れないでおいで。』

と子に教へて居た。そして、

『笛を少し吹いて御覽。よく陛下の御前で笛の役をおつとめしたり

するのに少しよく稽古をしておかなくては。』
と云ふと、若様は嬉しさうにして笛を吹いた。
『大分うまくなつたね。此方の姉様の琴に合させて頂くことがあるからなんだね。』
姫様にまた、
『さあ、何か合させてやつて下さい。』
と云つた。姫様は困つたやうな風をしながら、低い爪音を立て初めた。大納言は聲拍子をとつて居ながら庭を眺めて居たが、縁に近い所の紅梅を見て、
『この氣分に離れない紅梅が實に好いね。兵部卿の宮さんは今日は宮中においでになるのだらう。あの方に一枝折つて行つて差上げないか。』
と云つた。そして

『光源氏が所謂盛りの大將で居られた頃、私が丁度こんな童で、お傍へよく行くことのあつた時のことを私は忘れられない。嬉しいものだつたからねえ。兵部卿の宮さんを今の世間では美男で居られるやうに私などは思つて居る。子供心に沁みたせいかとも思ふけれど、さうばかりでも確にない。六條院のことをお思ひ出しすると私でさへ胸が苦しくなる程戀しいが、身内の人などはあの方にお死別れした不幸さが思ひ遣られます。』
と云つて、凄い程の物哀れさを感じた風で居た。家來を呼んで紅梅を折らせた。
『光源氏におなぞらへするのはやはり兵部卿の宮さんよりない世だから仕方がない。あの方に手紙でもさし上げるのを慰めにでも思はなければ。』

獨言のやうに大納言は云つて、

心ありて風の匂はす園の梅をまづ鶯の訪はずやあるべき

紅い紙にこんな歌を花やかに書いて、匂の宮にお渡しするやうに、若樣の懷紙に挾んで持たせた。若樣はお懷しく思ふ宮にお近寄りする事が嬉しくて急いで宮中へ行つた。匂の宮は清涼殿の中宮のお宿直所からお出になつて御自身の御休息所へお行きになる處であつた。宮は若い役人が大勢お從きして來た中に、按察大納言の若樣の居るのをお見つけになつて、

『昨日は早く歸つたね。今日は何時頃來たの。』

とお云ひになつた。

『昨日餘り早く歸りましたから、それで今日まだ宮樣が宮中にいらつしやると云ふものですから、急いで參つたのです。』

恥しさうにして居て、そしてまた甘へるやうに若樣は云ふのであつた。

『宮中に居ない時でも二條院には居るのだから、彼處へも時時は遊びにおいでよ。若い人が澤山寄つて來る面白い處だよ。』

こんなことを宮は云つておいでになつた。この子一人とお話になるので、外の人は皆遠慮して御休息所を出て行つたりする者もあつた。人の少なくなつた頃宮は次第に打解けたこともお云ひにならうとした。

『東宮はおまへを御自分のものだと思つていらつしやるのだから私の處などに長く居てはおまへ惡いだらう。』

『東宮樣は可愛がつて下さいますか私は宮樣が。』

幼い殿上人は云つては惡いかと言葉を切つた。

『私が何だつて、さう思はれても仕方がないねえ。けれどさうぢやなく思つてくれないかねえ。おまへの家の東の姫樣と云ふのは女王さんなのだね。その姉樣をね、私が思つて居る事

をおまへが取次いで云つてね、私の戀人になつてくれるやうに賴んでおくれよ。』

若樣はふと思ひ出して外に置いた紅梅の枝を持つて來て、東の姫樣の居間の前に咲いたと云つて宮にお渡しした。

『私のことを云つてくれた後で貰ふのだつたら猶嬉しいだらうね。』

こんなことをお云ひになつて、宮は手に取つた花をつくづく見ておいでになつた。枝振も花の大きさも稀な見事な紅梅である。

『紅梅は白いのより香が劣るものとされて居るが、これなぞはさうぢやないね。』

などとも云つて、もてはやしておいでになつた。今夜は是非此處で泊つて行くやうにと云つて宮が餘りお勸めになるので、若樣は東宮の方へもよう行かずに居た。梅の花も耻しく思ふやうな好い香に滿ちた宮のお傍で寢ることは幼心地にまたない得意さ嬉しさであつた。

『女王さんは何故東宮の女御におなりにならなかつたの。』

『私はよく知らないのですけれど、宮仕はしないのですつて。誰方かの奥樣になるのでせう。』

などと寢物語に幼い人は云つて居た。大納言の心は自身の子の姫樣の婿に宮をお誘ひしたいらしいのであるが、雙方の姫樣のことを搜つてよく知つておいでになる宮は、東の女王を身に沁んで戀しくお思ひになつて居るのである。大納言へは、

花の香に誘はれぬべき身なりせば風のたよりを過さましやは

こんな歌を返しておかうとお思ひになるのは、西の姫樣を貰はせられることを宮は厭はしくお思ひになるからである。

『私の賴んだ事はお父さんや母さんに云はないで、おまへ一人の働きでしてくれないではいけないよ。』

宮は繰返して若樣にかうお云ひになつた。若樣も懷しい姉のやうに

思つて慕つて居るのは東の姫樣であつた。外の姫樣は兄弟らしく顏を常に見合すので親しい思ひのしさうなわけであるが、幼い心持には却つて奥床しい、内氣な、自分に對して隱れようとばかりする異父の姉の懷しさが勝つて居た。東宮の女御が花花しい今の身の上を見ては、同じ姉であつても憎い氣もした。せめて匂の宮とでも東の姫樣が結婚することにでもなつたらいいと若樣は思つて居たから、宮のお云ひ含めになつたことが嬉しくてならなかつた。宮のことはお云ひつけ通りに父に何も云はないでおかうと思つたが、今朝頂いたお歌だけは昨日の御返事であるからと思つて持つて行つた。

『浮氣な戀の好きな方が、私だの左大臣だのには何時もこんな風にお見せかけになる。浮氣をされても好い風流男に出來ておいでになるのだから、眞面目がつたことをお云ひになるのは却て厭に人に思はせる。』

などと大納言は云つて、今日もまた若樣の出仕するのに、

かぎりなく匂へる君が袖なれば
　翁も春はかかること申し候よ。あなかしこ。

こんな手紙を書いて匂の宮に持たせて上げた。御覽になつた宮は、いよいよ大納言は自分を婿にしたい心で居るとお思ひになつて、さすがに胸がときめかぬでも無かつた。けれども、

花の香の匂へる園にわが行かば色を愛づると人の云はまし

と云ふ今度の御返歌も素氣ないところのないでもなかつた。眞木柱の君が退出して歸つて來た時宮中の話などを良人として、

『先日ね、あの子が參りました時、好い香が著物にするのでせう。けれど、まだ誰も氣が附かないで居ますのに、東宮樣がちやんとお知りになつて、あの子に、おまへは兵部卿の宮さんに可愛がつて頂いて居るのだらう。道理で私を粗末にするのだと憤つてお見せになつたの

がをかしう御座いましたよ。あの宮さんへよく伺候致すので御座いますか。唯今迄は餘りそんな事も御座いませんでしたのに、彼方からお使ひにならうとお召しにでもなつたので御座いますか。』

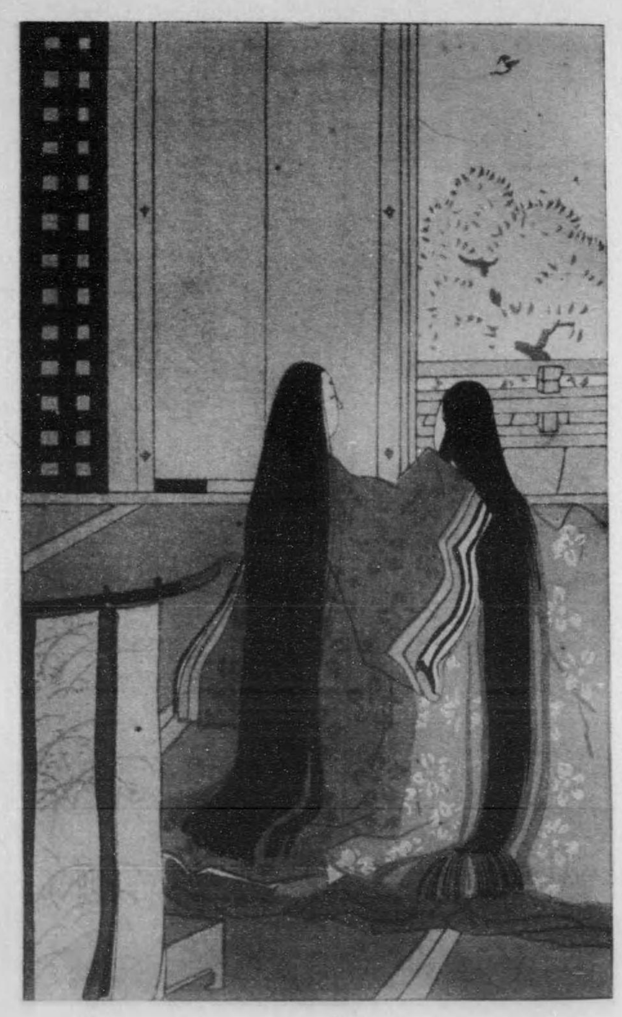
と聞いた。

『さう、この間ね、梅の花がお好きな方だから、女王さんの座敷の前の紅梅をね、彼に一枝お持たせして上げたのだよ。成程宮のお傍でお宿直をしたのだから、きつと朝は彼にも好い香がしたらう。あの宮樣はほご好い香を澤山身につけることを知つて居たら、宮仕の女などの確に特色になるだらうがねえ。薫の中納言のは態と附けるのでなくつて身の中からそれが出て來るのだから、どうしても佛の功德を受けた人としか思はれない。それはさうと梅の花は好いものだね。いかにも兵部卿の宮さんがお好きになりさうな花だ。』

近頃の大納言は何んでも匂の宮を好いことにして賞め立てるのでな

ければ氣が濟まなかつた、二十になつて居る東の姫樣はものの情がもう解されなくはない、弟から聞く匂の宮の戀に心が動かされないでももとよりない。さうではあるが結婚をしようなどと云ふことはゆめにも思はれなかつた。父のない心細さが妙齡の貴女に獨身の淋しい道を穩かに歩む事を勸めるのであつた。

「西の姫樣の處へ多くある緣組の話や、戀の手紙の來るやうな事も此處には稀なのであつた。匂の宮お一人はこの姫樣に淺くない戀を續けて運んでおいでになつた。大納言が一言宮が御所望を御漏しになつたらと自身の女のことを思つて居る矢先へ、繼女を呉れとは云はれぬことであると宮はお思ひになつて、唯だ直接の文に心を靡かせようとばかりしておいでになつた。返事をしないことはいよいよ宮の戀をあほるやうな事になつて、宮は斷念をされる事はなかつた。眞木柱の君も思ひ切つて匂の宮を女王の婿にしようかとまで氣の進むこともあつたが、餘



り浮氣らしいお身持で、お通ひ所が多く、宇治の八の宮の姫樣も情人にして、遠い所を常に通つておいでになると云ふことも知つて居たから、やはりこのお志はお返しする方が好い事だと決めて、餘り度度續いてお文の來る時などは自身の方から御返事を出すことにして居た。

竹河

光源氏の一族とは少し離れた側の、後の藤原關白の家のことを書かう。尙侍の玉鬘の君の生んだ關白の子は男三人女二人であるが、それぞれの未來の日に大きい光明のあるのを疑はずに、年月の經つのをもどかしがつた關白が俄かの病死をしたので、遺族は夢のやうに許り思はれて、豫期されて居た姫樣を宮中へ入れる事なども其儘になつて居た。動產や不動產から得る收入が減るわけはなく不自由知らずの家であることは別として、薄情な社會は近いこの間まで其程の阿諛を敢てした權勢の家へも、主人の亡い後の門をくぐつて行かうとする人の數は

多くなかつた。淋しいにつけて凋落衰運と云ふ忌はしい自覺が一家の人を毒して行く。僻みをも起させて行く。瑠璃樣の近い身寄は多いのであるが、貴族の家庭の窮屈さは今迄の交際も十分に出來て居なかつたし、それに關白の性質が誰とも圓滑に行き兼ねたのと、政治上では親戚であらうが知人であらうが、主義の少しでも違つた者は構はず退けたりなどもした、そんな事や何かで親密にする者は少なかつた。源氏の君は昔に變らずお崩れになる時にも、養女として冷泉院の皇后宮の次には瑠璃樣をお書きになつて、遺産分配も受けられる遺言狀をお殘しになつたから、夕霧の君などは却て實の兄弟よりも兄弟らしく何かの時には宙ても來た。息子達はもう皆元服してそれ〴〵の官に就いて居るので、良人の居る時であつたならと思ふ母の身には苦しい堪忍も時には必要なこともあらうが、次第に陞進もして行かれるには違ひない。女の子はどうすれば好いかと瑠璃樣はそれが大きい苦勞

であつた。陛下には必らず宮仕をさせると云ふことを關白が申し上げて置いたので、もう大人になつた頃とお思ひやりになつた頃からは絶えずその御催促があるのであるが、もとから競爭者のありにくい中宮がますます陛下との御仲が睦じくなつて、他の後宮の人は皆唯氣の毒な有樣である中へ、自分の子が出て行つて、少し人らしい御寵愛があつた時には、外から受ける嫉みが思ひやられる。さうかと云つて、その氣の毒な人並になつて居ればいいとは可愛い子のために思ふことも出來ないなどと、瑠璃樣は入內について考へて居る。冷泉院からも是非ともと云ふ御所望があつて、尙侍の昔の素氣なさなどを今更お恨みになるお文も來た。

そのかみ君に思はれざりし我は、いよいよ老いて侮りを得べき身となりぬ。今の我身を心安きものと善意に解し給はば、養子に遣すとも、我を後の親とも思ひ給ひて讓り給ふべくや。

なごとお書きになつたのを拜見しては、自身の昔が以外な緣に囚はれて、戀しく思はれもしお思ひもした院にお背きする運命に默從してしまつたことを思返せば、せめて女をお上げして心のお詫を濟せようかなどとも瑠璃樣は惑つた。非常な美人であると云ふ評判があつて、戀を作る男が多かつた。夕霧の君の子で藏人の少將と云ふのは、三條の雲井の鴈の君を母にして居て、大勢の中での父の愛子である。兄達よりも官位が先に進みなどもする俊秀な若者で、美くしくもあつた。この人が熱心に瑠璃樣の大姫樣を妻にしたいとして居た。兩親のごちらからも離れない親戚であるから、この兄弟達の來るのを瑠璃樣も疎くはもてなさなかつた。少將は女達などとも心安くして居て、若い心の戀をこれらの女によつて姫樣に傳へさせ、伯母の許しをも得ようと力めた。女達の毎日のやうにそれを取次いで來るのをうるさくも思ひ、同情もし、氣の毒にも瑠璃樣は思つた。妹の雲井の鴈の君からの、そ

れについての手紙も絶えず來た。

まだ云ひがひなき若者ながら、親親を疎ませ給はぬ御心より、或はこのえにし許し給ふべくやと賴まれ候。

と夕霧の君から云つて來たこともあつた。併し瑠璃樣は大姫樣だけにはどうしても唯の結婚がさせたくないのであつた。少將が今少し官歷を踏んだ頃を見て、若姫樣の方と婚せてもと好いとは密かに思ふ處であつた。少將は正式な結婚が出來ない事であつたなら、盜んで行つても戀を遂げたいと迄思ひ込んで居た。そんな事があつてはと瑠璃樣の方でも用心して、

『おまへ達から姫樣の身の上に過失を起してくれるやうなことは決してしないでおくれ。お賴みだから。』

と云ひ聞かせてあるから、女達も進んで少將のためにどうしようとも手の下しやうがなかつた。六條院の晩年に朱雀院の女三の宮がお生

みになつて、冷泉院が子のやうに大切にしておいでになる四位の侍從は十四五位であるが、年よりは大人びて、落附いた心の見える、將來の榮達が誰の目にも今から映るやうな人であるのを見ては、瑠璃樣は其れを婿にして見たい氣もした。薫の君の居る三條の宮と此處とは近いので、此家の息子達に誘はれて遊びに來て居た。美くしい姫樣の居る家に來る若い人は誰も姿やかたちを作るのに浮身をやつして居たが、その中で綺麗な男と云ふのは藏人の少將、また優美な趣きにおいて勝れて居るのは薫の侍從であつた。六條院の子であると云ふ思ひなしが誰にも多くの尊敬を拂はせたが、それだけの品格も確かに備つて居た。こゝさら若い女達などは薫の君を賞めそやしてばかり居た。瑠璃樣も、

『あんな立派な若い人はない。』

とよく云つて居た。逢つてなつかしげに話をもした。

『六條院さんの面影をお忍びしようとするのには侍從さんを見る外はない。右大臣さんは餘りお身分がむつかしくおなりになつて、お目に掛ることも少いのだから、侍從さんを見て居る外はない。』

とも云つて居た。兄弟として扱はれて居る關白の未亡人の家を薫の君は來よい處に思つて居た。若いものの常である浮氣らしい氣分も有たず、眞面目で落著いた風のあるのを若い女達は物足らず思つて、戯れを云ひかけて困らせて喜ぶこともあつた。正月に瑠璃樣の兄弟の按察大納言、關白の先妻腹の中納言で居る長男などが來た。夕霧の君も六人の息子を皆伴れて出て來た。美くしさの何時も變りない若君しい右大臣である。息子達もそれぞれ綺麗で、父のある人の悠揚さの見えるのにも自分の子が見比べられて哀れに瑠璃樣は思つた。藏人の少將が秘藏子である事はこんな時にも目に立つのであつたが、戀する男はしめやかに漏す吐息もあつた。夕霧の君は几帳を中にして瑠

璃樣と語るのであつた。

『だんだん不精になりまして、役所の外は何處へも近頃はよう出ないで居ます。此方などへはよく昔の話をさせて頂きに來たくなるのですが、何時も其儘になつてしまひます。私の代りとお思ひになつて御用のある時は子供等にお命じ下さい。氣を附けてお氣に入るやうにしなければいけないとよく云つて居るのです。』

夕霧の君は少將のことをそれとなく斯うも云ふのであつた。

『私どもなどの事を今になりましても御心配下さいますのを、ごんにきあお力にして居るか知れないので御座いますよ。』

さうして瑠璃樣はこれも六條院の深い御恩であると思ふと云つて、話の續きに冷泉院が姫樣を御所望になつて居ることを語つた。

『宮仕と申すことは餘程家がしつかりとして居なければ引け目が多くて何時も苦勞の絶間がなからうかともまた思ふので御座いますがね。』

『大姫樣は陛下がお望みになつて居るやうにも聞きましたが何方になさつたら好いことですかね。院は蔭にお隱れになつたものですから、一寸聞くと御老人のやうにも取れますが、若若しい御美男でいらつしやるから、私などもお好い女があつたら差し上げたいやうな氣が何時もしますが、私の家には院の女御になるやうな資格のある者は一人も見つかりません。併し姫樣をお上げになるのを女一の宮の女御さんは御承知なさいますでせうか。あの方に氣を兼ねて隨分今迄上らうとする人が中途でよしたとも聞きますが。』

『女御さんからね、わざわざその事につきましてね、姫樣が來たら昔と違つて暇も多いのだから、あなたの代りに自分が世話もやいて上げたいと思つて居ると云つて寄越して下すつたものですから、それで私も其の氣になつたのが初めで御座いますの。』

と瑠璃様は云つて居た。此處に集つた高官達はそれから女三の宮の三條の宮へ行つた。朱雀院に御縁故の深い人達は今日もこの宮を粗略にせずに何かの時にする伺候を續けて居る。六條院へ報恩の一つと思つて行く人も無論多いのである。この家の左中將右中辨末の侍從も皆右大臣の供をして一緒に出て行つた。夕方になつて薫の君が來た。右大臣のもこの家のも若い公達は皆ざれとなく美くしく思はれた跡へ出て來た薫の君は梅や桃の散つてから咲く櫻の花のやうな鮮さがあつた。

『やつばり源氏の侍從様は別ですわね。』

などと例の若い女達は騒いで居た。

『姫様のお婿様にしてお並べするのはあの方よりない。』

我を忘れてこんな事を云ふ者もあつた。身を動かすにつれて薫の君の袖から懐しい香が零れて出た。こんな女達などとは違つた深窓の

姫様でもこれを勝れた著い男と見究めることは出來ようと思はれる。瑠璃様は持佛の間に居た時で、此方へと案内されたから薫の君は東の階から上つて其處の御簾の前に坐つた。近い庭の木の若い梅はまだ小い蕾を附けて居て、鶯も頼りない啼きやうをして居る。女達が集つて來た。

『あの梅を御覧遊ばせよ侍從様もう少し色氣を見せてもよささうなもので御座いますがねえ。』

『なあにね、あの梅は火のやうな赤い色を蕾の底に隠してゐるんですよ。』

『ですかしら。』

『嘘だと思つたら、誰か梅の傍へ寄つて見て御覧。』

『梅の花の色よりも、匂ひよりも、眞實は侍從様のお身體のお近くへ寄つてお匂ひに醉ひたう御座います。』

源侍從を突いたり轉したりもしかねない惡戲方を女達はするのであつた。瑠璃樣は奥の方から出て來て、

『おとなしい人を、よく恥しくもなくねえ。困つた人達。』

と云つてたしなめて居た。おとなしい人と云ふ言葉を一種の侮辱だとも思つて薫の君は苦笑して居た。この家の侍從が歸つて此處へ來た。まだ宮中の出仕を勤めない身であるから、交際も狹くて外の兄弟のやうに方方へは廻らなかつたのである。菓子と酒が出されてあつた。薫の君の歸つた跡で瑠璃樣は、

『右大臣さんは年がお行きになれば、なる程お崩れになつた院樣によく似てお行きになる。侍從さんは別段顏だちにお似になつた處もないやうだけれど、あの氣持の沈著は院樣のお若盛りは斯うだつたらうと私は想像される。』

と云つて、前の思ひ出に萎れて居た。女達は彼方でも此方でも源侍從

を賞めちぎつて居た。薫の君はおとなしいと云ふ淋しい名を呼ばれたのを口惜しく思つて、梅の盛りになつた二十日過ぎの夜に華奢男の稽古をする氣で瑠璃樣の子の藤侍從の處へ遊びに出かけて行つた。中門を入らうとすると自身と同じやうな直衣姿をした若い一人の男が立つて居た。その男が隱れようとするのを引き留めて見ると甥に當る少將であつた。中央の御殿の西座敷で琵琶や琴の音のするのに戀心を亂して居たのらしい。他目にも苦しい心持が見えるので、薫の君はこんな思ひは習ひたくないことであるとも思つた。琴や琵琶の音が止んだので、

『君案內をしてくれ給へな、私は夜餘り來たことがないから勝手が分らない。』

と薫の君は少將を促して御殿の方へ行つた。西の細座敷の前の紅梅の下で催馬樂の梅が枝を歌つて居ると、戸を開けて女達は高い調子の

琴を合せて彈いた。沈んだ空氣のないやうな家であることが嬉しくて、薫の君は此晩少し打解けた戯談をも女達と云つて居た。七絃の琴を客の座の前へ一つ出した。二人が譲り合つて手を附けないので、瑠璃様は薫の君に、

『私の父の大臣に似た音をお出しになると云ふことですから、前からあなたの七絃琴を是非聞かせて頂きたいと思つて居たのです。春の今夜は鶯にそそのかされてでもお彈きなさい。』

と子の侍従に云はせた。餘り氣も入れないで彈くやうであるが、薫の君の琴は物の心を多く包んだ音を立てた。

『めつたにお目にも掛れなかつたお父様でも、もうお出でにならないのだと思ふと心細くて、琴の音のよくお似になつたのを聞いても私は悲しくなる。一體侍従さんは若死をなすつた大納言さんによく似ていらつしやる。琴などは其儘の音をお出しになる。』

と獨言のやうに云つて瑠璃様は泣いて居た。少將も好い聲でいろいろの歌を歌つた。藤侍従は亡父の關白に似て斯う云ふことはよく出來ない男であるから二人に酒ばかりをすすめて居た。

『おさかなにおまへも一つ位は何か歌でも歌はなければ。』

と母に云はれて、侍従は二人が催馬樂の竹河を歌ふのに隨いて歌ひ出した。少將は今夜のやうに薫の君が戀する人らしい訪問をこの家へ續けたなら、誰の心もこれに傾いて行くのが見えるやうに思つて、味氣ない心を起して居た。翌日源侍従からこの家の侍従に、

昨夜のみだりがはしかりしを人人いかに見給ひけむ、
人戀ふる心のはしも春の夜のありのすさびに知られけむわれ

竹河の曲に聲合せ給ひし君よ。

こんな手紙を書いて來た。友の侍従一人に見せるための假名がちの手紙ではもとよりなかつた。中の御殿に持つて來て侍従は母や兄弟

と一緒にまた讀んだ。

『美事なもだね。この人ばかりは何から何まで今から斯うだからえらいねえ。子供でお父樣にお別れになつて、お構ひにならないお母樣のお傍で居て、それでこんなになる人もあるのだねえ。』

瑠璃樣は斯う云つて居た。侍從や右中辨の手跡の惡いのも小言にして云つた。源侍從のこんな手紙はそれからも時時侍從が貰つた。少將が案じて居た通りに一家の人の心はもう皆薫の君に集中されて居た。まだ稚氣の多い侍從も、この人を姉婿にして仲よくしたいなどと云ふ望みを持つて居た。三月になつた。櫻の多い庭の緣に近い座敷に瑠璃樣の二人の姫樣は出て居た。十九十八と云ふ程の年齡である。大姫樣は氣高い鮮かな美くしさに、花やかな愛嬌を添へて持つて居る。后とも云はずに唯の人の妻として見るには餘りに過ぎた容貌である ことが思はれる。今の時候に合つた淡い色のをいい程に重ねて著た

袿の裾まで顏の匂ひが零れて居るやうにも見えた。もう一人は桃色の上衣を著て居る。黒いつやつやかな髮が柳の枝を掛けたやうなたをやかさで後ろに引かれて居る。背がやや高い。高潔な顏だちで艶な處もその中に交つて居ないではない。貴女らしい奥床しさの飽迄備つて居る人であるが、華美やかな愛嬌などはない。碁を打つのに向ひ合つて座つて居るのである。弟の侍從が審判者に決められて近くに座つて居た。二人の兄が來て、

『侍從は大變なお氣に入りになつてしまつたものだね。碁の審判を命じられたと云ふのは非常な名譽だよ。』

と云つて座つた。女達はそつと居ずまひを直して居た。

『役所の用がだんだん多くなるので御機嫌を伺ひに來る暇がないんだのに、其間に兄さんが侍從よりお好きでなくなられて居てはつまらないねえ。』

と中將が云ふ。

『私は辨ですよ。こんな役の者には一層樹酌をしてくれなければ。』

と次の兄が云ふ。姫樣達は打ちかけた碁をやめて恥し相にして居た。

『私等は御所へ行つてもお父樣がおいでになつたらと思ふことがいくらあるか知れないよ。』

眞面目になつて斯う云つた上の兄が妹達を見る目には涙が溜つて居た。二十七八である。もう分別も備つた青年で、この姫樣達を亡父の考通りにそれぞれ后の位にして見たいと常々心の中で思つて居るのである。前の庭の櫻の中から勝れた一本の木の花を折らせて、

『外の木の花はとてもこれと比べものにはなりませんのねえ。』

などと姫樣達が云つて眺め合つて居るのを見て、中將は、

『あなた方の小さかつた時にね、この櫻の木を自分のだ自分のだと云つて爭つたことがあるのだよ。さうするとお父樣は大姫樣のだとお決めになる、お母さんは小い姫樣のだとお決めになる、だもんだから、やつぱり何方のものにもならなかつたのだが、その時にあなた方は隨分口惜しがつたものだ。泣いたりなどはしなかつたけれど、それにしてもねえ、この櫻が老木になつて了つたのを見るといろんなことのあつたのが思ひ出される。お祖父樣の太政大臣、六條院、お父樣、頼りになるそんな方々は一人も殘らず亡くなつておしまひになつたことを思はせられて氣が弱くなる。』

などと泣いたり笑つたりしながら話すのであつた。中將はある人の婿になつて居るため、妻處に居がちでこの人達と話して暮すやうなことも少いのであるが、櫻に引留められたか今日は緩りと遊んで居た。瑠璃樣はもうこんな人達の親になし餘つて居る年とは假にも思はれない程美くしい盛りの女にも見えて居た。冷泉院はこの人をやはり今日になつても戀しい忘れられな

い人にしておいでになる。其慰めにとお思ひになつたのが初めで、姫様を是非にと御所望にもなつて居るのである。院參については此息子達が反對の意見を持つて居た。そんな話が今日も出た。

『院へ姫さんを上るのは餘りに仕榮のしないことだと思ひますよ。院はまだお若くお見えになる美男でいらつしやるから、そんなことで、姫様と不釣合とは思ひませんがね、明かにもう盛の時代と云ふものをお通り越しになつた御境遇なんですからね、世間でもをかしく思ひますよ。見す見す時勢に反抗して見せるやうなものですからね。中宮をそんなにあなたがお憚りになるのなら東宮へはどうなんです。』

と中將は母に云ふのであつた。其處には夕霧の君の姫様が勢を持つて居ると云ふことが以前から瑠璃様を其氣にさせない原因になつて居るのである。

『お父様がおいでになるのだつたら、遠い先のことまではともかくも、陛下の女御にでも東宮へでも、出す時の心持が違ふのだがねえ、どんな華美なことでもお父さんなら出來たのだがねえ。』

こんなことを瑠璃様が云ひ出したので、誰の心も濕つぽくなつてしまつた。中將などの立つた後で姫様二人はまた碁を打つことになつた。三番の中を一番多く勝つた方が昔から持主の決らない櫻の木を取ることにしようと戯れながら決めた。暗くなつて來たので緣の御簾を上げて、大姫様若姫様附きの女達は賭物に興味を持つて碁盤の上を見据ゑて居た。例の少將はまた藤侍從の處へ遊びに來たが、侍從は兄達と一緒に出かけた後で居間には居なかつた。人の少ない夕方の御殿の中を彼方此方と歩いて居るうちに、細座敷の戸の隙間から見える向うの座敷に姫様達の碁を打つのを知つた。じつと覗いて居る心持は夢のやうであつた。佛に伴れられて此處へ來たやうな氣もした。夕

闇の落ちかからうとする折から、其れ程しかとは見えぬが櫻色の衣を著た方が戀しい人であると云ふ見分けも附いた。この人が我手の玉とならずに他へ行く成行となつたなら、どれ程自分は苦しいであらうと少將は今迄の戀に一層烈しい戀を加へて思つた。女達のいろいろの色の著物を著た姿も趣多く見えるのであつた。右が勝つた。若姫樣の方である。

『高麗樂がもう聞えさうなものですね。』

などと高い聲で云ふ者もある。宮中のものの勝負遊びの時の右の勝の場合に奏する樂のことである。

『櫻もとうとう御主人が決りました。』

と云ふ者がある。これも右の方なのであらう。少將は何の事であるかよくは分らないが、面白い事のやうに思はれて自身も交つて何か云ひたい氣もしたが、唯だ驚かすだけで氣の毒なことであると思つて其

日は歸つた。それからはまたあんなことがないかと戀しい人の居る處を窺ひ歩いて居た。姫樣達は負けて取られた櫻勝つて得た櫻を毎日の遊事の種にして歌を詠んだり戯れ合つたりばかりして居た。勝つた姫樣の使つて居る女の童が庭へ降りて散つた櫻の花片を澤山拾ひ集めて來たこともあつた。餘りうかうかと暮して居る、確りとしない人達であると思つて、一人親の瑠璃樣はこんな事にも行先を案じて居た。院からは姫樣の事で毎日お手紙が來た。妹の女御の處からも、疎疎しく私を思つておいでになるからのお思ひ立ちにくさではありませんか。院は私が邪魔をするからであらうなどと、此間も憎いやうにお云ひになつた事もありました。お戯れにもせよ、私は苦しく思ひます。出來るならば近いうちに姫樣のおいでがあれば好いと私は待つて居ます。

と云ふやうな手紙をまた送つて來た。院へ上るのがこの女の定つた

縁かも知れぬ、さうでなければこんなにまでお望みになるわけもない、餘りお心を惱すのも恐れ多いことであると、瑠璃樣の心はやうやう決つた。手廻りの道具などは關白が生きて居るうちから入內の日の用意に整へて置いた物が不足もなくあつた。女達の衣類其外のこまごました仕度を院參のために瑠璃樣は急いで作らせて居た。この話を聞いた少將は死ぬやうに思つて母を責めて、こんな手紙をまた書かせた。

かたはら痛さを知りつつ、またも今更なる願ひの心申し出で候ふも、子故の闇に光りの世知らぬ女のなすことと許させ給へ。子は君も持ち給ふ。思ひやりおはさば哀れなる母ごころを慰め給はれかし。あなかしこ。』

『困つたこと。』

と瑠璃樣は歎息しながら、

我子の縁をさかしく定め得る身とも自らを思ひ候はず、唯なるがままにと思ひ居り候ひしを、あまりに望ませ給へるまま、宿命のある事にやなど惑ひて、院參のことのお受けも致しまつりしに候。少將の君我子にさる忝き心つくし給はるならば、唯今の程少し御心靜めていませ、必ず慰め得べき日のありと伯母心に思ひ申し候。かしこ。

こんな返事を書いた。大姫樣の院參を濟せて後少しの時間が經つてから、若姫樣を少將に婚こうと瑠璃樣は思ふのであるらしい。今一緒に然うすることも二人の女の片附を急いだやうで、世間體もよくないことであるし、少將の地位もまだ婿にするのには物足らぬ處もあるらと瑠璃樣は思つて居た。少將は戀人を姉妹取替へて思はうとは思ひもかけぬことであつた。一度見てからは其人の顏が目に離れないで、どんな時にその人と打解けた話も出來るのであらうかと行末の日をもどかしく思つた心の望も皆無慘に打壞されてしまつたのであつ

た。悲しみに沈んで居る狀は云ひやうもない程である。かひない繰言に過ぎぬことにもせよ、せめて苦悶の端を戀人の弟に語らうと思つて、何時もの侍從の處へ行つたが、侍從は源侍從の文を見て居る處で侍從はそれを隱さうとした。薫の君のに違ひない氣がして少將はそれを奪つた。秘密のあるやうに疑はれてもと思つて、侍從は餘り隱さうとはしなかつたのである。それとなく唯世の中の事が自分の思つて居ることと違つた成行になつて行くと云ふやうに朧氣に恨みを見せた文である。

わが戀のむくいえられぬ果も見つものうらめしき春の暮かな

こんな歌をも書いてある。人はこんな風に體惡くなく其失戀を語つて居るのに、自分は何と云ふみじめな不態な失戀の仕樣を人に見せ歩いて居るのか、こんな狂態で戀をして居たのだから戀しい人を動かすことも出來なかつたのであると、遣瀬ない思ひが胸に込上げるので、少

將は口も利かれなくて其儘出て、何時も話相手にする中將と云ふ女の部屋へ行つた。侍從が返事を出す相談に母の處へ行くのが見える。そんな事も若い少將には腹立しかつた。戯談にして聞いて居ることも出來ぬ程心を傾けて人を恨んだり、自己を罵つたりするので女は困つて餘り受答もしないで居た。碁の勝負の夕のことを云ひだして、

『あればかしの夢でももう一度見たいのです。それが、もう絶對に望めない。私は何を樂みにしてこれから生きて行かれます。もうあなたなんかと話をすることも暫くの間のことです。』

などと云ふ。若姫樣については少しばかりの戀も持つて居ないらしい。碁の夕の隙見がかう云ふことにも到らしめたのかと中將は道理にも思はれた。

『奥樣はあなたに御同情遊ばしたおはからひをしようとしていらつしやるのに、あなたはそんな亂暴なことばかりをお云ひになる。奥

様がお聞きになつたらどんなにお腹をお立てになるか知れません
よ、私ももうあなたを氣の毒とも何とも思やしません。』
相手を挫かうと思つて中將は怒つて見せた。
『あの時負けたのだから氣の毒でならなかつた。私を目くばせで呼
んで下すつたら、助言をして勝たせて上るのだつたのに。』
少將は自身のことばかりをかう云ひ續けて居た。
『勝負だけは人の力でどうともなるものぢやありませんわ。』
と云ふ女を少將は憎いと思つた。
『生きるのも死ぬのも私はあの人任せだ。』
かう絶望的にも云ふのであつた。その翌日はもう初夏の四月に入つ
たので、更衣をした。兄弟等が御祝儀を述べに宮中へ行くのを知らず
顏に、少將は自身の居間に閉籠つて物を思つて居た。母の雲井の贋の

『何時か瑠璃樣に逢つた時、今度の話もあつたのだつたが、私が反對を
唱へたなどと云ふことが院へ聞えては濟まないとも思ふから、それ
も云はなかつたし、少將のこともう一步進めた事が云はれなかつ
た。私が口へそれと出して賴んだら瑠璃樣だつて聞かないわけに
は行かなかつた事だつたらうに、殘念なことをした。』
父の夕霧の君はかう云つて居た。少將は、
花の中に心を置きて春は暮し候ひしが、今日より我心のさまよふは
何の蔭もなき灰色の木立の中に候。
こんな手紙を戀人に書いた。瑠璃樣の家では姫樣の前で、上な身分の
女達が寄つて、院參について失戀をした男等の歎きを、かうも聞いたあ
とも文に書かれたと云つて姫樣に話して居る中に、中將は生死を任す
と云つた男は、言葉ばかりでなく實際思ひ込んだものであつたと云つ
て居た。母の瑠璃樣も哀れに思つて聞いて居た。併しこの人の心に

は恨らみも捨てさせえられる取替のものがあると信じて居るのである。九日に姫様の院參の日が定められた。夕霧の君は儀式用の車、車附の供男などを大勢この家へ遣した。雲井の鴈の君も恨めしくは思つて居るが、今迄それ程に親しくもしなかつた姉に、少將のことから頻繁に手紙を送るやうになつたのが、もうその交渉がないやうになつたからと云つて、昔にかへつた疎い中になるのも耻しいことに思はれたので、新女御の用に、人へ贈物にする女の衣類などの美くしいのを何枚も作つて持たせてやつた。

心より病つくりて怪しう現心もなきやうなるものを看護わづらひ居り候うて、外の事何の一つも聞き知るを得ず候ひしうちに、女御御院參の日となりし由やうやく承り候。何なれば今日迄に身にかなふ用の何なりとも仰せつけ給ひて、鈍き心を答め給ふことの無かりしやと、それのみお恨めしく思ひ參らせ候。

こんな手紙が添つて居た。穩かな中に恨みも漏してあるのを氣の毒に思つて瑠璃樣は見て居た。夕霧の君からも手紙は來た。用をさせるやうにと云つて二人の息子を遣したのであつた。情のある人であると思つて瑠璃樣は嬉しく思つた。弟の按察大納言からも女達の乘る事などを遣した。その夫人は關白の子の眞木柱の君であるから、何方から云つても最も濃い親戚なのであるが、實はそれ程親しくも平生からして居ないのである。眞木柱の君の弟の藤中納言は自身で來て、中將や右中辨と一緒に用事を助けて居た。この日に父が居たならばとは異腹の兄にさへ哀れに思はせることであつた。少將はまた中將に手紙を送つて來た。その中に、

頼み少き命のさすがに惜まれ候。哀れと思ふとだに唯一言その君の言葉得たらば、それに力づきて生くる望みもありやなど思はれ候。

などとも書いてあるので、それを持つて姫樣に見せようと思つて行く

と、二人の姫様は一緒に寄つて別れるのを悲しがつて居る處であつた。

院參の粧ひのもう出來上つて居る大姫様は美くしかつた。父が宮中へ上つて、そしてお后になるのであるとよく云つて聞かせたことを思ひ出すと、それとは違つた成行になる初めの日を悲しくも思はれて姫様の心は沈んで居たので、自身のために失戀の悲しい目を見て居る男の文も手に取つて見る氣になつた。叔父も叔母も立派な人達の中に、何故こんな無茶を云ふ息子が出來たかとなどと思ひながらも、死ぬなどと云つて居ることを誠のやうに信じて、書いて來た手紙の端に、

哀れとはいかなる時にいかならん人に云ふべき言葉ならん。常ならぬ世の別れ、ゆゆしき死、さる方さまにてはほのかに知りたれど。

と書いて、

『これを書き直して上げないといけないよ。』

かう云つて中將に渡した。草稿は其儘少將の手に渡つた。此上もない嬉しい事のやうに少將は思ふのであつたが、其人はもう幾時の後に院の女御になる人であると思ふと、涙は留度もなく流れた。少將はまた手紙を書いた。

ゆゆしき死と云ふものを我がものとせずば哀れとも云ひ給はずや。生きながら死ぬるすべの無く、君のその一言は終にこの耳に聞く期なきものとやならむ。かなし、かなし。さはれ塚の上にも誠に其御言葉掛け給ふものならば、身をも殺しつべし。戀に死にしは誰がためと、わが名と共に御名の立つは悲しけれど。

姫様は返事を前に遣つたことを後悔して居た。瑠璃様は院參の儀式を宮中へ行くにしてもこれと變りのあらうとも思はれぬ程華美やかにした。瑠璃様は院へ著くと直ぐ妹の女御の處へ行つていろいろと話をした。夜が更けてから新女御はお宿直に上つたのであつた。皇后宮もその外の女御達も皆若さの過ぎた人達であるのに二十にも足

らない美くしい新女御が來たのであるから、院がこの人にお傾けになる愛の一通りでないと云ふことも自然の成行と見るより外はない。新婚した若い妻と居る普通の人の樣に、院は新女御を大事におしになり、お睦じさの限りを見せておいでになつた。瑠璃樣も暫くは新女御に附いて居ることと院は期待しておいでになつたが、瑠璃樣は直ぐ歸つてしまつたのであつた。院が始終傍へお置きになる薫の君は、昔の光源氏が同じ年頃に父の帝に愛されておいでになつたのと似て居た。薫の君は院に居る女御達とは皆心安くして居た。新女御の處へも敬意を見せて度々行く人は薫の君であつた。自身をどう思つて見て居るであらうと云ふ昔を忘れない心も下には無論あるのである。靜かな夕方に藤侍從と一緒に薫の君は院の庭を逍遙して居た。眞面には云はずに薫の君はその人の弟に失つた戀の心の惱しさを漏すのであつた。

『私の心任せになることではなかつたのだから、ねえ、君、私はあの當時どうなればいいと毎日思つて居たか、それは君は知らないでせうけれど。』

眞面目な藤侍從は薫の君を心から氣の毒に思つて居るのである。薫の君は胸を掻き亂される程にこの事を思つて居るのではないが、口惜しいとは眞實思つた事なのである。少將は自殺もしかねない程になつて居た。その外院の新女御を思つた青年で、若姫樣に戀を移すのも少くなかつた。瑠璃樣は若姫樣を少將に遣りたいとは確かに云つたのではなく、雲井の鴈の君への義理と思つて、それとなくほのめかしておいたのであつたが少將はもう伯母の家へ手紙を送ることもなく行くこともなくなつた。夕霧の君の子は誰も皆冷泉院へはよく伺候するのであつたが、藏人の少將は新女御の上つてからは餘り行かない。稀にお表の方の御殿へだけは顏を出しても、味氣ながつて逃げるやう

にして歸るのであつた。陛下は入内の志の堅いことを屢父の關白からお聞きになつて居たのであるのに、當人が院參をしてしまつたので、どうしたことかとお思ひになつて、兄の左中將を呼んで仰言があつたさうである。

『陛下はお怒りになつていらつしやるやうです。こんなことがありますから、院に上るのは世間でも變に思ふと前に私が云つておいたのです。陛下からあんなお言葉を聞くのは、つまり陛下がさうお思ひになつて居るのは私や弟等にごんな不利益なことであるか知れません。』

中將は腹立たしい心を母に見せて云つた。

『私がそれ程姫樣の片附をあせつたのぢやないのだけれど、餘り院が眞心籠めて御所望をして下さるものだし、宮中では父親のない女御の肩身の狹さも一層だらうと思つて、それで院へお受けもすることにしたのだつたよ。それ程に反對して思つて居たのなら、何故其の時分に一人でも私によく意見を知らせてくれなかつたのだらう。おまへ達ばかりでない、右大臣さんなども私の御相談した時には惡いともお云ひにならなかつたのに、今日になつてそれとなしに私をお笑ひになつて居る。けれごもね私はもう諦めて居ます、因緣だもの。』

と瑠璃樣は大樣に云つて居た。自分が院を戀しくお思ひしたこと、さう云ふ昔の因緣によつて斯うなつたとは云へないことである以上、陛下のお怒りも甘んじてお受けして居なければならないと瑠璃樣は思ふのであらう。

『中宮さんがいらつしやるからとお云ひになるけれご、院には叔母さんが居られるぢやありませんか、自分が世話をするのなんのつて叔母樣は云つて居られてもさうは行きますまいよ。まあ私等は見物

して居る。中宮さんがいらつしやつたつて宮中に外の女御や更衣は居ませんか。義理などと云ふことを其處ばかりでは目に置かない處に宮仕の面白さはあるとされて居るのですよ。叔母さんとの關係は併し少し違ひますからね、あの方と妹とが葛藤を起すやうなことがあつては見つともないですよ。』

右中辨もこんなことを母に云つた。新女御は月日の經つに隨つてますます深い御寵愛を受ける身になつた。七月からは姙娠をした。惡阻を惱んで居る姿は美くしさを一層深く見せて、かうであるから多くの男が戀を懸けたのも最もであるなどと院にお思はせした。新女御の慰めに始終管絃の遊びなどを傍でさせておいでになつた。薫の君は何時も院のお近くに居るのであるから、新女御の琴の音などを聞くこともあつた。この春の月夜の晩に梅が枝の歌に合せて彈いた中將と云ふ女の琴をも院がよくお彈かせになるので聞き覺えが出來て、そ

れさへも懷しさ悲しさの媒になることもあつた。翌年の正月の十四日には男踏歌の催しがあつて若い役人の中でも勝れた人を選つて舞人や歌者を決められた。薫の君は右の歌の頭である。藏人の少將は舞の方に居た。宮中から直ぐ踏歌の連中は冷泉院へ來た。親王達高官達も多く出て來た。陛下の御前よりも冷泉院へ來ることを誰も晴れの場所のやうに思つて居るのである。女一の宮の女御も新女御もお表の御殿の方へ來て觀て居た。少將は戀しい人に見られるのだと思つて胸を轟かせて居た。竹河を歌つて階の傍へ歩み寄る時去年の或夜のことが思はれて少將は涙ぐんで居た。不覺なこともせぬかと我身が案じられもした。踏歌は御前のが濟むと皇后宮の方へ舞つて行つた。院も亦其方へ行つて觀ておいでになつた。晝よりも明るく澄み渡つた月夜に踏歌の人等はまた彼方此方とこれから廻つて行くのであつた。夜が明けてから三條の宮へ歸つた薫の君を冷泉院から

お召しがあつた。

『暫く休ませて頂きたいのに。』

と云ひながら出て行つた。歌の頭になつたことを名譽だとお云ひになつて、可愛くてならないやうに院は薫の君の顔を眺めておいでになつた。院は萬春樂を口ずさみに遊ばしながら新女御の方へおいでになるので薫の君もお供をして行つた。新女御の實家の妹や女達なども昨日の見物に來てまだ其儘留つて居たので、常よりも一層花やかさが多く漂つて居る御殿のやうに見えた。廊下の戸の外に座つて、聲に聞き覺えのある女達と薫の君は話して居た。

『昨夜は隨分と晴れがましいことでしたよ、外では藏人の少將の舞が水際立つて見えたのですけれど、この院へ來た時にはどうしたのか、さうも見えなかつたやうですね。さうぢやありませんでしたか。』

と薫の君の云ふのを聞いて、少將の心持に同情する者もあつた。

『竹河を昨年お歌ひになつた晩のことをあなたは覺えておいでになりますか。』

と云ふものがあつた。ふと涙が零れた。自分の戀もやはり淺いものではないらしいと薫の君は思つた。

『昨夜竹河を歌つた時、世の中はこんな悲しいものかと云ふやうな氣がしましたのは、やはり去年の竹河が忘れられないからでせう。』

濕つぽくかう云つたのを女達はをかしがつて笑つた。四月に瑠璃樣の家で院の女二の宮がお生れになつて可愛くお思ひして居た。早く來るやうにとばかり院がお云ひになるので、五十日目位に姫宮をお伴れして新女御は院へ入つた。女一の宮唯一方をお持ちになるばかりであつた院が、限りもない美くしさをお持ちになつた小い人を子としてまたお見になるお心は現しやうもない程のお喜びで滿ちて居た。院はいよいよ新女御を離れ難いもの

にお思ひになつた。此處にばかりおいでになる程の有樣であるから、女一の宮の女御附の者はかれこれと云つた。

『女御樣のお心からお呼びになつた姪御さんにこんな目をお見せられになる。』

などと云ふのである。二人の女御の心から出るのでもない忌はしい擦れ合ひがよく起るやうになつて來た。兄である人達の云つたことが一つ一つ眞實になつて來た。運命に咀はれて居るものと我子を指差して人の笑ふやうな結果も案じて思へば來ないにも限らない、院の深い御愛情が大きい賴みであるにはあつても、長い年月に勢力の地盤をそれぞれ固めて來た后の宮や女御達に惡く當られては自分の子は堪へ能ふことでないとも瑠璃樣は心に愁ひて居た。陛下は大姬樣の院參をお心の底から不快にお感じになつて、そのことをよく人にも仰せられると云ふやうなことも瑠璃樣に云ふ人があつた。これも苦し

いことに瑠璃樣は思つて若姬樣を宮中へ入れやうと決心した。それには自身の尙侍を讓つて表面を公式の最高の女官として置くのが安全な策であると思つた。願つて見たのであるが、これはさう容易く行くことでない。死ぬか尼になるかでなければ尙侍は罷めることの出來ないのが慣例になつて居るのである。さうでなければ關白の在世中に瑠璃樣は既に辭して居たに違ひない。陛下は故人の外叔父への情誼をお思ひになつて、故例の中の變つた例をお搜しになつてとうとう瑠璃樣の望みが許されることになつた。さうなつて見るとまた宮中へは入つてもこの女にはお后になる運はないものと諦めをつけて居るやうなものであると、母心には悲しくも思はれるのであつた。少將に許さうとしたことのあつたのを思つては其方に氣も兼ねられた。次男の右中辨を使にして、夕霧の君に、

『陛下が上の子を院へお上げしましたことについて御機嫌を惡くし

ておいでになると云ふことを聞いたものですから、せめて妹でも代りに宮中へ差し上げようかと思ひますが、人が聞きますと唯の縁組を嫌ふのが私ごもの主義のやうにとられないかと躊躇も致されます。』

と相談のやうにして云つてやつた。

『陛下がお氣持を忌くしておいでになるのは、御もつともだと恐れ多いことだが私等も思ひます。ことに尚侍にもおなりになつたのですから、その方から云つても是非宮中へお行きにならなければなりますまいと思ひます。』

と夕霧の君は云つて歸した。今度は中宮へ御遠慮をしながら尚侍は宮中へ入つた。良人が居たならばこんな思ひはしないでもいい筈であると瑠璃樣はときどき昧氣なく思つた。大姫樣は美人と云ふ評判の高かつたことを陛下はよく知つておいでになつたのであるから、其

人と違つた妹の來るのを物足らずお思ひにならないでもなかつたが、尚侍はお氣に入らなくはなかつた。瑠璃樣は尼になると云ひ出したが、まだ二人の姫樣についての用も多いのであるから、佛への勤めも怠ることになるやうに思はれる、今少し延した方がいいであらうと息子達は留めて居た。瑠璃樣は時時宮中の尚侍の處へそつと行くことがあつた。院はまだ昔の戀をお忘れにならないのであるから、行かねばならない時にも瑠璃樣は院の女御の方へは行つて見ようとしなかつた。昔の院のお志の忝さを思ふ心から、誰の反感を買ふのも知らず顏に、上の女の子を上げた上に自身までも浮名を立てるやうなことになつたなら、どう世間で攻撃をされるか知れないと思ふのが瑠璃樣の心中であつた。そんなわけがあるとは女の女御の知らないことであるから、昔から父は自分を特別に愛してくれ、母は櫻の爭ひの時を初めとして若姫樣を可愛がることが勝つて居たなどと思つて恨んで居た院

はもとより瑠璃樣を恨んでおいでになつた。

『私のやうな日蔭の處へあなたは來たから、母樣に妹よりも粗末に扱はれても仕方がない。可愛さうだね。』

などと新女御をいたはつて院はおいでになつた。こんなことでいよいよ御愛情が深くなつて行くばかりである。新女御はまた男宮をお生みした。長い間御一緒であつた后の宮や女御達にそんなことがなくて新參の人が一の宮の御生母になつたのであるから、よくよく院とこの女御とは前生からの因緣の深い處がおありになるのであらうと云つて、世間の人は目を聳てたのであつた。院は云ひやうもなく一の宮を可愛くお思ひになつた。在位の時であつたなら、このことがどれ程大きい意義を持つたことになるやも知れないのであるとお思ひになつて、宮とその生母のためにこのことを口惜しくお思ひになるのであつた。女一の宮を最愛の子とお思ひになつて居た院が、初めて皇子

をお得になつた珍らしさに、特に可愛くお思ひになるのを見た時、女一の宮の女御は初めて姪の君寵を妬ましく思ひ初めた。院に奉仕して居る役人達の同情や、昔からの后や女御達に傾いて、新女御のことは何につけてもよく云はない。瑠璃樣の息子達も、かうなつては、

『初めから私等が云はないことでしたか』

といよいよ母を責めるばかりであつた。自分の女のやうな氣苦勞は知らないで居る人も多いであらう、よくよくの運と天分とのある女の外は宮仕をさせるものでないと瑠璃樣は歎いて居た。姫樣を欲しがつた若い人等は次第に位が進んで、婿であつても恥かしくないやうなのが幾人もあつた。其中には源侍從と云つて最も若かつた人は今は宰相の中將で、美男でもあるし、人格の高い奥床しい青年になつて居る。匂ひ、薫なども云はれて時代の寵兒とされて居る。親王達、大臣達がこの人を婿にしたがつて居るのも事實で、その人はまたそれを煩いも

ののやうに避け歩いて居ると云ふことも評判であるのにつけて、

『昔あの人が大姫様を欲しがつた頃は頼りない小い人だつたがねえ。』

瑠璃様は感慨に堪へないやうにこんなことも云つて居た。藏人の少將だつた人は、今三位の中將で居た。

『中將様は好いお羽振ですつてね、其からお美くしい事は一等でいらつしつた方だし、あの方に姫様を上げてお置きになつたなら、ねえ。』

『眞實にさうだつたら、あんなにお氣苦勞ばかしは遊ばしていらつしやらなかつたでせうにねえ。』

などと云ひ合つて居る女達もあつた。三位中將は左大臣の婿になつて居るのであるが、妻に持つて居る愛情などは薄いもので、初戀の院の女御のことをどうしても忘れえない、この戀を必ず遂げようと云ふ常識を外れた心願も持つて居るのであつた。新女御は院に居溜らずにこの頃は實家に歸つて居がちであつた。若姫様は却て花やかな君寵

も持つた尚侍として宮中で一つの勢力を作つて居た。左大臣が死んだので、夕霧の君が補せられ、右大臣には按察大納言がなつた。それぞれの人が上へ上つたのであつたが、薫の君は今度中納言になつた。三位の中將は宰相になつた。薫の君は悦びの披露に瑠璃様の處へ來た。

瑠璃様は逢つて、

『見るかげもない私の家のやうな處へもわざわざ廻つて下すつて眞實に嬉しく思ひます。』

と云つた。艶な若やかな聲であるのを、かうであるから今も冷泉院が昔ながらに戀しくお思ひになるのであらうなどと薫の君は思つた。

『そんなお禮を仰つしやると何だか私の心があなたに徹底して居ないやうに思はれます。平然の御無沙汰をお憤りになつていらつしやるのではありませんか。私は陞進した嬉しい顔を一番にあなたに見て頂きたかつたのです。』

と薫の君は云つて居た。

『花花しい世界をお持ちになるあなたに、私などの老の繰言めいたことを云ふのは間違つて居ますけれど、お目に懸れることも少くなつたのですから、來て下すつた時にでもと思つて云ふことを御迷惑でも聞いて頂戴な。私の處の院の女御さんのことですがねえ。女一の宮の女御さんは叔母さんではあるし、お后の宮樣も六條院樣との關係で他人とはお思ひになるまい、ひいきに思し召して下さることだらうと思つて居ましたのが手前勝手だつたのかも知りませんけれど、皇后宮も女御さんも私の處のを後に來て無禮をする女とばかしにお憎しみになるものですから、可愛さうでね。此頃も宮樣達だけはお殘しさせて女御さんは家へ伴れて歸つてあるのですよ。院はそれを惡くお思ひになつていらつしやるかも知れませんから、何か仰せがあつたら、あなたからよく事情を申し上げて下さいよ。眞

實にこんな心配ばかしをしようと思つて院へお上げしたのではないのですがねえ。つまり私が馬鹿で考が足りなかつたのですわ。』

と云つて、瑠璃樣は泣いて居るやうであつた。

『そんなにまで何もお思ひにならないでも好いことですよ。宮仕と云ふものの氣苦勞の多いことは昔から云ふことではありませんか。院におなりになつたからと云つて、後宮の暗鬪は少しも滅るわけのものぢやありません。神經を過敏に働かせてつまらないことを大ぎやうに考へ合ふのがお后や女御の通弊ですよ。それば かしの氣苦勞もしないで濟むと初めにあなたがお思ひになつたのなら、あなたの方が間違ひですよ。どんなことも見て見ぬ振り、知つて知らぬ振りで行くのが一番好いのですよ。男の私などから院にそんなことを申し上げられることぢやありませんよ。』

と薫の君は思つて居ることをきつぱりと云つた。

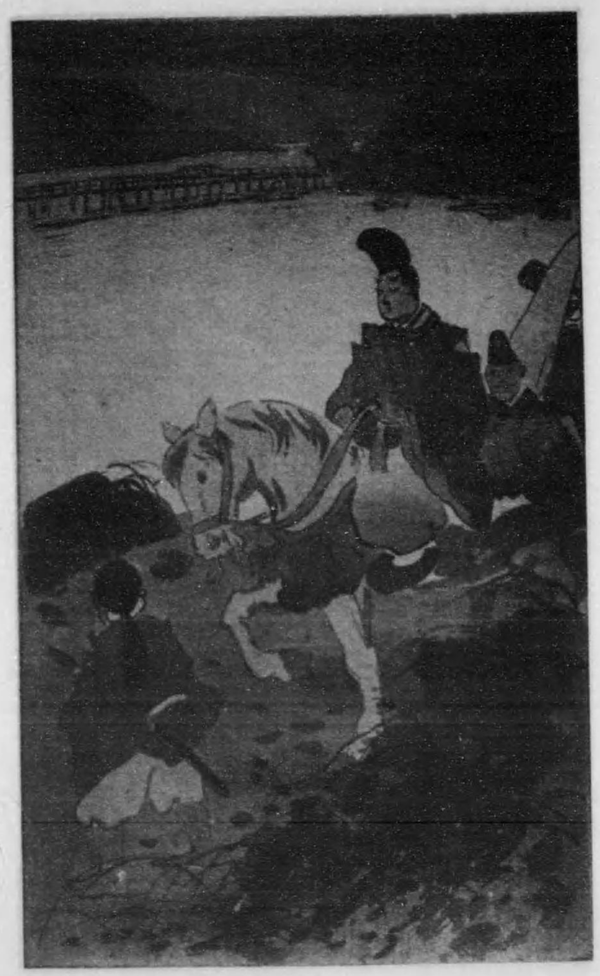
『あなたがお出でになつたら聞いて頂かうと思つて居たことも、さう云はれてしまへば仕方がありませんわ。』

かう云つた瑠璃樣は笑つて居た。女のことを苦にして居ると云ふ女親とも思はれない程のみづみづしさ大やうさが見えるのを、薫の君は院の女御もかう云ふ處のある人なのであらう、宇治の宮の女王を戀しく思はれるのもやはり斯う云ふ和らかみを有つて居る人だからであるなどと思つて居た。尙侍もこの頃は歸つて居るので御殿御殿が花やかに見えた。新右大臣の家はこの直ぐ隣なのである。新任披露の祝宴に招かれて客が大勢集つて居た。兵部卿の宮も御招待したのであつたらしいがお出ではなかつた。姫樣をこの宮に緣付けさせたいのは右大臣の心であるが、宮にそのお心はないらしい。右大臣も夫人もこの日の客の中に群を拔いた風采の源中納言を見ては、この人にも或望を持たないで居ることは出來なかつた。隣の賑かさが手に取るやうに聞えて來るにつけても、昔のことが思ひ出されて瑠璃樣の家の人は皆濕つた心になつて居た。前の兵部卿の宮がお薨れになつて、何程の間もなくこの右大臣と眞木柱の君との戀が成立つたのを、世間では餘りよくも云はなかつたのであるが、其儘戀は續いて圓滿な家庭を作りおふせたと云ふことは見苦しいことでもなかつた。其翌日新宰相の中將が瑠璃樣の處へ來た。

『官位などはどうなつても私は嬉しいとも何とも思ふことが出來ません。昔の思ひ事が齟齬した悲しさばかりが月日の經つに隨つて強くなつて行きます。』

と云つて涙を袖で拭いて居た。男の美くしい盛の二十七八である。

『世の中は思ひの儘になると思つていらつしやるから、官位のことなどは氣にも何も掛らないのだらう。殿樣がおいでになつたら家の子なども苦勞を知らずに戀でもし歩くだらうに。』



と瑠璃様は歎いて居た。參議の中にまだ入れない息子達をさう思ふのである。末の子の侍從と云つたのは頭中將になつて居た。

橋姫

その頃世間から顧みられない親王が一人おいでになつた。母方なども極めて尊貴な筋であつたから、高い位にお上りになる資格もまた輿望も昔はお持ちになつて居た。移り易い時と云ふものは、權勢の失墜と共に、深い暗い處へこの宮をお落しした。外戚の人達も皆この親王のために描いた花やかな夢を破られて、失望して出家をしたり、病氣を起して早く死んだりしてしまつた。宮は孤立とより云ひやうもないお身の上になつておいでになるのである。夫人も以前の大臣であつた人の姫様である。親達がこの親王を配遇に得たことを、直ちに立后

の式の獅子や高麗犬を目の前に見る自分のやうに思つて喜んだことなどを夫人は思ひ出す時、淋しい境遇を情なくも悲しくも思はないではないが、深い戀はこの貴人の夫婦の感じる缺陷の何物にも勝つ大き い力であつた。さうして長い間王子も王女もお持ちにならなかつた。

『可愛い子供が一人欲しいね。』

と宮は時時お云ひになつた。思ひ掛けなく夫人は姙娠して美くしい姫樣を一人生んだ。可愛くお思ひになつてあらん限り大切に育てておいでになるうち、夫人がまた身ごもつたので、今度は男であつたならと望んでおいでになつたが、やはり姫樣が生れた。産は平産であつたが、後が悪くて煩ひついて夫人は亡くなつた。宮は戀の終局の以外なのに呆れておいでになつた。堪へ難い厭はしい人生であると思ひながら、優しい戀人がほだしになつて出家も遂げずに今日迄は暮して來たのである。男やもめで子を育てて行く、この身分で居てはそれも見

よくないことである。今から僧になつてしまはうと深く宮はお思ひになるのであるが、姫樣達の保護者は外に誰もない。哀れな孤兒には出來ない御愍然から、今日明日と日を送つておいでになるうちに姫樣等は大きくなつて來た。美くしい生れに親心は多く慰められておいでになつた。小姫さんを女達などもこのお産が無かつたならと思ふ心から粗略にもするのであつたが、夫人が外のことのもうはつきり意識されない臨終に近い時に、小い姫樣を氣にして、

『あなた、この姫さんをね、私のかたみだとお思ひ遊ばして、可愛がつてやつて下さいな。』

と一言云つたことを忘れがたくお思ひになる宮は、大切にお思ひになる大姫樣にも勝る程後の女王を愛しておいでになつた。光るやうな美くしさを小姫樣は持つて居た。大姫樣は靜かな生れで、誰も及び難い氣高さと品のある和味懐味を我物にした人であつた。二人を生命

のやうにお思ひになつて大切にして育ててお
いでになつたのであるが、宮のはづかに保つておいでになる富は何事もお心の儘にはさせない。女達なども他所の浮華に心を動して、暇を取つて出て行くものが次第に殖えて行く。その當時夫人の病中でよく人選の出來なかつた小姫樣の乳母は身分相應な卑しい心を露してこれも早く出てしまつた。それからは乳母なしで宮がお手づからと云ふ程にして小姫樣の世話を見ておいでになるのである。邸はさすがに廣い所に住んでおいでになつた。御殿廻りも、お庭の池も築山もだんだんと荒れて行くが、もう確りとした家扶などは居ないので、直して行く手段を講じる者もない。草や木の花も趣味を同じくした戀しい夫人と一緒にお眺めになつた時には心の慰めになるものと宮は思つておいでになつたが、今はさうともお感じにならない。宮は唯だ御持佛の間だけを美くしく鮮やかにお飾りになつて明暮その前においでになつた。姫樣達に引かれる愛のために出家のお出來にならない事さへも御本意でなくお思ひになる。況して今更戀人を作らうなどとは夢にも思つておいでにならない。その心は年月の經つに隨つてますます堅くおなりになつて、今ではお姿が唯だ俗のままでおいでになるだけで、僧と云つても及ばない程の聖い生活をしておいでになつた。

『そんなに何時までも死んだ方のことを思つてばかしおいでになるものぢやない。もう今日になつたのだから、いい加減にお忘れにならなければ。それに困つてもおいでになるのだから、財產を持つた女と再婚をされるのが何よりのお策だがね。』

などとこの宮のことを蔭口に云ふ者もあつた。似合しい御緣談をすすめに來る親切者もないではなかつた。宮はもとよりおさきになる筈はない。佛勤めをなさる暇には姫樣達にいろいろの遊事をさせて見ておいでになつた。大姫樣は重い深味のある性質で、小姫樣は大樣

な可愛い人である。うららかな春の日影に、池の水鳥が樂しさうに浮き歩くのを御覽になりながら、宮は二人の姫樣に琴を敎へておいでになつた。平生はお氣にも留らない水鳥の雌雄の睦じさが、この時は宮のお心をそぞろに亂した。涙を目にお浮べになつて、

『私はあなた達の母樣に殘された一羽きりの水鳥だね。』

と云つて、涙を袖でそつとお拭ひになつた。お美くしい宮である。前よりは非常にお痩せになつて居るが、そのために上品な艶かしさが加はつてもお見えになつた。大姫樣は硯箱を引き寄せて、硯の上に手習をするやうな手附で何かを書いて居た。

『これにお書きなさい。硯にはものを書くものぢやない。』

と云つて、宮は紙をお出しになつた。姫樣は恥らひながら歌を書いて居た。

巢立ちたる雛の心になげかれぬ一つのみなる親の水鳥

まだ續けて上手には字が書けないのである。かう云ふ幼い歌にもこの時の宮のお心持には沁むやうな悲しさをお覺えになつた。

『あなたも書いて御覽。』

と云はれて、小姫樣も長くかかつて歌を書いて見せた。

やうやくに水鳥の雛生ひ立ちぬ一人の親のつばさの下に

二人とも新しい著物は著て居ない。數少い女達であるからこの時はお傍に附いて居なかつた。可憐な顏が淋しく二つ並べられたのを見ておいでになる宮のお胸は痛さ切なさをお感じにならぬわけはない。宮は經卷を片手に持つて、目でお讀みになりながら、姫樣達の稽古の樂に合せて歌をうたつておいでになる。大姫樣に琵琶、小姫樣に十三絃の琴を常に合させながらお敎へ込みになつて居るので二人とも、聞きにくくもない程の上手になつて居た。宮は父の帝にも母の女御にも早くお別れになつた爲に、身を入れて御敎育をしようとする人もなか

つたから學問などはあまり深くお出來にならなかつた。況して處世術などと云ふものは全でお知りにならない。貴人と云ふ中にも稀な程大様で女性のやうな方であつた。父帝の傳領、外戚の大臣の遺産などと云ふ、何時の世が來ても盡きる筈もない多くの物を行方も知らずしておしまひになつた。お家の中の諸道具器物などだけは立派で、また數も多くお持ちになつた。この宮に敬意を見せて伺候する者や、同情を寄せる人は一人もなかつた。宮はお若い時から雅樂寮の樂師のでた者ばかりを邸にお呼びになつて、音樂の遊びを熱心におやりになつたので、音樂の方の技倆は勝れて持つておいでになるのである。宮は光源氏のお弟で、八の宮とも呼ばれておいでになつた。冷泉院が東宮でおいでになる時、朱雀院の母后が廢太子を行はうとして、この宮を代りに立てようとしたために、光源氏の派からは向う側に置いてお見られになつた。いよいよ其方の子孫の全盛の世となつたのである

から、宮は引き籠めさせられたきまの有がひない身でおいでになるのである。宮はもう浮世の榮譽には望みを持つておいでにならない。ある時八の宮のお邸が火事で燒けてしまつた。かへすがへすも御不幸な宮は、京の中に相當なお持家もないので、宇治にある山莊へ移つてお住みになることとなつた。川に近くて網代に寄る波の音のかなり騷がしく聞える所である。靜かなことをお望みになる宮のお心には飽き足らずお思ひにならないでもないが、それも是非がないとお諦めになるより外はなかつた。こんな日になつても宮は夫人のことをお思ひしにならぬ時もない。

さすらひぬ戀しき君も君と居し家も煙となりはてしのち

こんな歌をお詠みになる宮は、お心の底から生がひなく思つておいでになるのである。一層伺候して來る者はなくなつた。土地の者などが宮をお慕ひして御用をしようと云つて來ることなどはあつた。此

宇治の山に立派な阿闍梨が一人居た。學問が非常にあつて、社會から
も重んぜられて居るが、俗界との交渉を厭つて、朝廷のお召の時などに
も餘り出ることをしなかつた。その人を宮は師としておいでになつ
た。阿闍梨は經の中に籠つた精神を宮にお話しては一層深く佛の道
に宮をお導きしようとして屢お邸へ來た。
『心だけはもう十分出家が出來て居ますが、子供が居るので僧になつ
てしまふわけにも行かない。』
などと、阿闍梨には隔てなく宮はお話しになつた。この阿闍梨は折折
冷泉院へも伺候して、經の中の御不審のある所をお說き申し上げても
居るのであつた。ある時外の話の序に、
『八の宮さんは佛學のお解りが實におよろしいので御座います。さ
う云ふ天分でお生れになつた方なので御座いませうが。またその
佛家の精神を形に現して行つておいでになるところは宛ら立派な

高僧でいらつしやると思はれます。』
と阿闍梨は院に申し上げた。
『まだ落飾はされないのか。若い者があの宮さんのことを俗聖と他
名をつけて居るよ。私は宮さんに同情して居るのだよ。』
と院は云つておいでになつた。薫の君がお傍に居てこの御問答を聞
きながら、自分こそ現世を厭はしいものと知つて居ながら、人目に附く
程の佛勤もしたことがない、俗の姿ながら佛聖の心になると云ふこと
はどうしたなら出來ることなのであらうかなどと、阿闍梨の言葉に氣
を留めて、八の宮のお上をよく聞かうとして居た。
『出家のお志は長い前からお持ちになるので御座いますが、姫樣を置
いてはと何時もそれが障碍になると歎息して仰せになります。』
と阿闍梨は云ふ。音樂に嗜好を持つた僧で、宇治の姫樣達のことを、
『女王樣方の琴と琵琶をお合せになるのが河の波に響きます時には、

極樂が何時も私に想像される程で御座います。非常にお上手なので御座います。」

と古めかしい賞めやうをして居た。院はお微笑になつて、

『そんな聖の宮樣を父にして居ては世間並の女とは違つた人かとも想像されるが、さうでないのが嬉しいことだ。宮さんがそんなに氣に掛るのなら、私にその女王さん達を預けて下さると好い。さうされないだらうか。』

とお云ひになつた。冷泉院は十の宮でおありになるから八の宮にはお弟であらせらる。朱雀院が晩年にお弟の六條院に女三の宮をお娶らせになつたことを院はお思ひ浮べになつて、宇治の宮の女王達をつれづれな時の遊びがたきにしたいとお思ひになるのである。若い薫の君は却て姫樣の話は耳にも留らなくて、八の宮のお心の持ちやうが床しくばかり思はれて、お逢ひして見たいと深く思つた。阿闍梨の歸へる時に、薫の君は、

『是非八の宮さんにお目に懸つて、いろいろな御注意を受けたいと思ふのですから、あなたから其事を前にお話し申し上げておいて下さい。』

などと云つて頼んで居た。院は俗界を離れた御住居を人傳に聞いて床しくお思ひすると云ふことを言傳にお云はせになつて、

世をいとふ心は山に通へども八重立つ雲を君やへだつる

と云ふ歌をお送りになつた。阿闍梨は宮をお喜ばせすることの出來るのを嬉しく思つて、宇治へ歸つて直ぐ八の宮のお邸へ行つた。普通人からのさう云ふ使をも久しくお見にならない宮は、この滿足した意をどうして現して阿闍梨に見せようかとお惑ひになつた位である。そして精進料理をいろいろと作らせて酒などもお勸めになつた。

あとたえて心澄むとはなけれども世を宇治山に宿をこそ借れ

宮は卑下して佛道の方のことをお云ひにならずに唯かうした歌をお返しになつた。さうであるから冷泉院は、八の宮の心にはやはり世間から忘れられたことが痛恨として殘つて居ると氣の毒にお思ひになつた。阿闍梨は宮に薫の君のことを、

『源中將は非常に信仰を持つた人で御座いまして、宮樣にかう申し上げてくれと云はれました。幼少な時から佛道を深く知りたいと云ふ志はありますが、朝廷にお仕へをして居る片暇ですることですから、其方の學問はまだ何の端くれもよく解りませんし、また世間に厭世家らしく見られますことも、それ程の徹底した心にもなつて居ないのですから憚られないでも御座いません。宮樣のいはゆる俗聖でおいでになるお心を人の話に聞きまして以來は、お慕しくて、是非お目通りして、お弟子にして頂きたいお願ひを申し上げたいと思つて居ります。』

とお話したのであつた。

『世の中を厭はしいものと思ふのは、皆自身がそれぞれ苦しい目を見たと云ふことが原因になるのであるが、年が若くて、そして何事も意の通りになる境遇の人が、さう云ふふうに佛の信仰を持つと云ふことの出來るのは感心なものですね。私などはこれでも世が厭にならぬか、ならぬかと仕向けられて、漸く今日に至つて、それでまだ恥しい程度の信者なんだから、さう云ふ人は却て此方が友人になつて貰ふに氣の毒な位におもふ。』

と宮はお云ひになつた。それからは手紙の往復もするやうにおなりになつた。さうして薫の君が宇治へ來た。八の宮のお住居は、この人が人に聞いて想像したよりも一層淋しい山莊であつた。世間には唯だ場所を自然に近く取つただけで家や内部は都の榮華を其儘にした處などもないではないが、そんな樣子は夢にも此處では見出せない。

絶える間のない水の音を聞いて居ては神經衰弱も起るであらうし、夜なども到底ゆるりと寢られさうには思はれない。信仰のおありになる宮には却てこんな處においでになるのが、現世と云ふものと容易く別れ得る方便になるかも知れないが、姫樣達はどう思つて暮して居るだらう、何としても優しみなどと云ふものは餘程缺けた人になつて居るに違ひないなどと薫の君は思つた。宮のおいでになる持佛の間と は襖子だけが隔てになつた處に姫樣達の居ると云ふことは知れるのであるから、若い人である限りは、必ず人知れぬときめいた感情も起さずに居られない筈である。ふと妙な心持になつた時、自分は戀などと云ふものと遠ざかつて心を澄ます法を考へるために態態俗聖の宮のお弟子にならうとして來たのであるから、世間の浮ついた人のやうな眞似はしたくないと薫の君は思ひ返した。富をお持ちにならない宮のために薫の君に、いろいろと心を籠めた贈物を始終して居た。宮の

人格や、信仰に服した眞心から、間を多く置かずに三里の道を通つて御訪問を缺かなかつた。薫の君の思ひ通りに、宮は俗に居ながらも得られる悟道の道筋、法文の解釋などを親切にお授けになつた。高僧とか、學才のある僧とか云はれる人は世間に少くもない樣であるが、餘りに人間離れのして居ることや、生れのよくない處がその僧の總てに見えて嫌厭の情を起させることなどで師とする心には一寸なれない。八の宮の得ておいでになるお悟りはそれ程深いものでもないが、人格の力が人を多く敎へると云ふことによくかなつた師であると薫の君は嬉しく思つた。同じ佛の敎でも、近い例などを多く交せて宮はお話しになつた。役所の用の濟んでから來る薫の君を、宵の間御寢所の近くへお呼びになつてお話しになることなどは、ますます師を懷しく思はすことであつた。薫の君は毎日でも宮と對して居たく思つて、暫く行かれないで居る時などは苦しさを覺える迄宮をお慕ひして居

た。薫の君がこんなに八の宮を尊敬するのをお見になつて、冷泉院からも度度宮へ御消息があることになつた。年に何度かは少くない見舞の金品をもお贈りになつた。薫の君も宮の經濟の方の御助力をすることを心がけて居て忘れないのである。かうして三年程經つた。

秋の末のことである。宮は四季に分けてお行ひになる勤行を、この頃は風のために川の網代を打つ浪の音が甚いから、落着いた佛事を行ふのに宜しくないと云つて、阿闍梨の寺へお行きになつてその七日間を彼方でお勤めになつて居た。姫樣達はまた一層淋しい思ひをしながら留守をして居た。薫の君は久しく八の宮にお逢ひしなかつたことを思ひ出して、不意に宇治へ行きたくなつた。まだ月が明るい頃に京を出て來た。宮の山莊は川の北にあるので、船で渡つたりなどする世話はないのである。薫の君は馬に乘つて來た。道も見えない程川霧の立ち廣がつて居る木下道を行く時、荒い風が吹いて葉末の露がはら

はらと零れて顏に懸つた。かう云ふ時刻にする戀の忍あるきなどと云ふことも薫の君の餘り經驗したことのないことなので、心細いやうにも面白いやうにも思はれた。從者には人拂ひの聲も立てさせずに行くのであるが、この人の持つた香しい匂ひがこの主人の誰れであるかを知らぬかと遠くから云ひ散して歩く。山莊近くへ來ると、樂の音らしい響が風に交つて聞えて來た。何時も姫樣達がよく音樂の合奏をすると云ふことを聞いて居ながら、まだそんな場合に一度も行き合はなかつた名高い妙手でおいでにゐる宮の一絃琴もまだ自分は聽いたことはない、今日は又ない嬉しい折であると薫の君は思つて、山莊へ入ると其音の琵琶であることが確かに聞き分けられた。清く澄んだ撥音である。それに合せて鳴して居る琴も艶な音色であつた。暫く此儘聞いて居たいと薫の君は思つて、案内も乞はずに居たが、直ぐ氣取つた家笼が周章て出て來た。行儀張つた男である。宮が山の寺にお

いでになることを云つて、お知らせしに行かうと云ふのを、
『たあに、もう僅かばかしでおあつにになるのに、横からお騒がせするやうなことをしてはいけません。今度はお目に懸らないでおきませう、かうして霧に濡れて參つただけの慰めを姫樣に云つて頂きたい。それで澤山ですよ。』
と薫の君は云つた。家從が醜い顏に笑ひを見せて、
『さう申し上げませう。』
と云つて入らうとするのを、
『一寸。』
と薫の君は呼び止めて、
『姫樣方の琵琶や琴を人の噂に聞く計りで私はまだ拜聽したことがないのです。伺ふのに丁度今が好い折だと思ひますが、何處か隱れた場所で私に聽かせて下さい。私が來たと知れて俄に歌めておしまひになるやうなことがあつては駄目だから。』
『人の聞かない時は夜でも晝でもあゝしたお遊びをしておいでになるので御座います。つまらない人間でも京から來た人がお邸に居りますし時にはことんとも音をおさせになりません。宮樣が大體姫樣方のおいでになることさへ人に知らせぬやうにとばかりしておいでになるので御座います。』
家從の云ふのを聞いて薫の君は笑ひながら、
それは無駄なことですね。此方の女王樣方の勝れた方である評判は京で誰一人知らないものは無いのだから、それで場所を考へてくれ給へ、是非今の曲一つだけでもよく聽かせて欲しいのですから。私は好色男ぢやないから、何の危險性も持つて居ない、唯だ姫樣に多大の同情を持つて居る若い男だと云へば若い男さ。安心して計ひ給へ。』

と云つた。

『ごういたしまして、あなた樣をお疑ひ致したりなどして宜しいもので御座いますか、唯だ後でひよつと知れますと悪いかしらと考へましただけで御座います。あなた樣、姫樣方のお居間の前は竹垣で庭も仕切が出來て居りますそ、その垣の處へおいでになつて居れば宜しう御座います。』

家從は薫の君に隱れ聽の場所を敎へた。供の人等をこの男が西の細座敷でもてなして居た。敎へられた處の竹の透垣に附いた低い戸を少し開けて薫の君は向うを見た。霧のためにほのかな艶めかしい光をした月を前に御簾を短く卷き上げて姫樣達は緣近く座つて居た。緣側には寒さうな風をした童女が一人と、やはりそんなやうな女達が少しばかり居る。內方の人の一人は杜に少し身體を隱す樣にして、琵琶を前に置いて手で撥をもてあそんで居た。月が急に明るくなつた。

その人が、

『扇ぢやなくつても、これでお月樣を招くことが出來ますよ。』

と云つて、空の方を見上げた顏が、愛嬌に滿ちたものらしく思はれる。

一人は琴の上に俯伏しになつて居たが、

『日の暮るるに撥して日を午に返すぢやないのね。お月樣をお呼びになるのか。』

かう云つて笑つた顏は琵琶の人よりも氣品は勝つて居た。

『でも、いいぢやないの。』

などと云つて戲れ合つて居る人は、見ずに思つて居た佛めいた世離れのした人では夢にもない。和い美の匂ひが限りもなく漂つて居た。昔の小說などを若い女達などの讀んで居るのを聞くと、きつとその中には斯うした思ひ懸けない處で美くしい人を見ることが書いてある。不自然なことであると思つて居たが、こんなことも實際に於てあるこ

となのであると薫の君は身に沁んで覺えるのであつた。霧が澤山降つて居るので、はつきりとはもとより見られるのではない。また先刻のやうな光を月が不意に見せることもあらうと薫の君は心待ちにして居る時、客のあることを告げた者があると見えて靜かに、御簾を下して人が皆奥へ入つた。其が周章た振もなく餘裕を見せた懐しい樣子であつた。艶しさと高尚さとを思はずに居られない。薫の君は庭を出て、京の家へ乘つて去ぬ車を取りに人を遣るのであつた。家從に、

『折の惡い處へ伺つて、宮樣にはお目に懸れませんが、女王樣方にお目に懸れる機會を得ると思ふと嬉しくてなりません。かう云つてお逢ひ下さるかどうか、姫樣に伺つて見て下さい。』

と薫の君が云つたので、家從は姫樣の處へ來てさう云つた。顔までも見られたなどとは想像もしないが、遊事に彈いて居た琵琶や琴がひよつとすると薫の君の聽く處となつたかも知れないと思ふだけでも恥

しくてならないことであつた。薫の君は先刻庭から見て居た座敷の緣側へ出て來た。田舍めいた女達はこの瀟洒とした青年に言葉を出すことも出來ずに、はらはらとして敷物を敷かせたりなどして居た。

『この御簾の前へは初めて參つたのですが、私の心の思ひは古いものになつて居るのです。假初な戀の心で斯う年月を重ねて遠い道の御訪問が續けて居られるものでせうか。それは解つて居て下さるに違ひないと信じて、可愛さうだと屹度お思ひになつて下さることと思ひますが。』

薫の君はかう云つて居た。今傍に居る女達には姫樣からの返事を體よく取次ぎ得られるやうな者は一人もない。遠い處に寢て居る女を起して遣つて、それを伴れて來る迄、それは大分長い時のかかることであらから、さうした上の返事は一層むつかしくなつて、假初言を云つて置くわけには行かないであらうと思ふので、大姫樣は自身で、

『何も理解致すだけの力がないので御座いますから、それに知つた顔を致してお可愛さうなどと申し上げることは出來ません。申すのが嘘で御座います。』

とほのかな聲で答へた。

『世にまたとない聰明な清らかな御家庭の方だと思ひますから、ありのままの御返事も伺へるかと思つて、私は忍び餘る戀を申し上げも致すのです。さうして深いか淺いかよく私の心をお見になつて下さい。私は世間の人のやうな好色な心などからあなたをお動ししようなどと思つて居るのではありません。私の性質は人の噂でお聞きになることが御座いませう。飽き足りない世の中に生きて居る心の苦しみも、話相手になつて聞いて頂き、またあなたのお慰めをすることが自分の力で出來るやうになつたなら、どんなに嬉しいであらうと思ふのが私の望みなのです。私の生命なのです。』

などと薫の君は多く語るのであつたが、姫樣は答へるのを苦しく思つて、起させに遣つた老女の來たのに應答をさせることにした。

『まあ何と云ふ勿體ないお席で御座いませう。御簾の中へお入りも願ひませんで、若い人達はかうで御座いますから仕方が御座いませんん。』

老女が人馴れた調子でかう云ひ續けて居るのを、姫樣達は少し眉を顰めて聞いて居た。

『あなた樣の深いお志は私共などもよく辨へて居りまして、感涙に咽んで居るので御座いますから、若い主人の心にも分つて居ないことはないのですが、お禮をお云ひになることはお出來にならないらしう御座います。』

と云ふのを、薫の君は憎いやうな出過ぎた女だと思はないでもないが、態度が普通でなく、人柄の好い處も見えるのであつたから、

「あなたは誰方か知りませんが、どんなにお話し申し上げてもお一人の御同情もようえない私のために、あなたのお出でになることは非常に力になつて思はれます。」

と云つて居た。態と質素にしてこの客の來たことは狩衣を着たのでも知れると、こんなことを老女は思つて眺めて居た。生れつきのものと思はれる好い香がこの人に添ついて居るのを知つて、隨喜の涙とも云ふべきものを流して居た。

「出過ぎたことで御座いますが、是非あなたのお耳に入れて置きたいと思ひます昔話が一つあるので御座います。實はかう云ふ時をお與へ下さいましと佛樣にも長い年月お願をし續けて來たことなので御座います。私は餘り嬉しいもので御座いますから涙が無暗に流れて來まして、話に筋道をつけることが出來ません。」

と云つてぶるぶると慄へて居るのが分る。老人と云ふものは何でも

ないことによく泣くものである。格別な事の潜んで居るのでもなからうと薫の君は思つたが、さうとばかりも思へないやうなのが少し氣になつた。

「私は此方にあなたの樣な方のおいでになるのを今日迄知らないで居ました。昔のことと云ふのはどう云ふことなんですか。云つて下さい。」

「はい。申し上げますとも。あのう三條の宮に居りました侍從は亡くなりましたさうで御座いますね。もとよりあなた樣は私を御存じの筈は御座いません。此方へは五六年前から參つて居るので御座います。此頃藤大納言と仰つしやいます方のお兄樣で、やはり大納言でお亡れになつた方のことをお聞きになつたことが御座いませう。その私の主人の大納言樣にお別れしましたことをまだ近い事のやうに存じまして、いまだに其時の悲しさを忘れることが出來

ないので御座いますが、あなた樣がもうこんなにおなり遊ばしたのをお見上げしますと夢のやうに思はれます。大納言樣の乳母で御座いましたのが私の母で、私の名は辨と申します。朝夕お傍の御用をさせて頂いて居りますうちには、御主人のお洩らしになるお心の苦しいお思ひ事などを承ることも御座いました。もう御危篤な御容體におなり遊ばした時に、傍へお呼びになりまして少しの御遺言を承りましたものですから、是非あなたにお目通りしなければならなかつたので御座います。かう申し上げました跡の話をお聞き下さいますなら、何時か靜かなお話の出來る時をお待ち下さいまし。餘計なことを何を申し上げて居るかと若い人達が彼方で惡口を申して居るで御座いませうから。』

と云つて、辨は皆まで話さなかつたが、片時も心を離れないその疑ひの本體を見せられいて居る氣もしたが、巫女が他界の消息を語るのを聞

やうとするので、薫の君の心には云ひやうもない嬉しさと悲しさの波が立つた。殘らず聞きたいと思ふ欲の起るのを鎭めて、

『今の處私によく分らないお話ですが、亡くなつた方のことをお聞きして居るのだと思ふと、心が引き込まれるやうに悲しく思はれます。きつと其續きを何時か聞かせて下さい。霧が晴れないうちに今日はお暇しようと思ひますから。』

と云つた。宮のおいでになる寺の夜明の鐘が霧の中で幽かに響いて居た。姫樣達の心持が思ひやられて、滅入つたやうに引き込んだ樣子で居るのも尤もであるなどと薫の君は哀れに思つた。

尋ねこし槇の尾山の朝ぼらけ家路も見えず秋の霧立つ

都の人にさへ勝れた優美な男だと稱へられる薫の君の姿が、人らしい人も見ることのない山莊の人の目に珍しく美くしく映るのは當然のことであらう。

雲のゐる峰の岨路を秋の霧いとどへだつる寒き日は來ぬ

と低い聲で云つた後で、姫樣の歎くけはひの聞えるのも悲しかつた。

外には何一つ若い心を引くものもない處に、この姉妹が居て、自分の心を堪へ難い哀感を有つて掻き亂すなどと薫の君は思つた。

『もう少しお話を申し上げたいのですが、私を世間の若い人並にお扱ひになるのがお恨めしいから今日は歸ります。もう少しこれから はお心安くさせて下さい。』

と云つて立つた。家從が用意しておいた西座敷へ來て其處で川を眺めながら休息するのであつた。網代に大勢の人が出て居るのが見えるけれど一向に漁れないらしいと薫の君の家來は云つて居た。もう度度此處來へて居るので、さう云ふこともくはしく解るやうになつて居るのである。いくつも小い船に柴を積んで川を下つて行くのが見える。それも世渡りの一つであらうと薫の君は眺めて居た。硯を借

りて、

さす掉のしづくにわれも袖濡れぬいかにさびしき宇治の橋姫

かよわき御心を朝夕に、自然がいかに慈悲なくさいなみつつあるやなど思ひ申し候。

と書いた手紙を姫樣の方へ持たせて遣つた。寒さうに家從の顏は憔へて居た。

掉し歸る宇治の川びと朝夕の雫や袖を朽しはつらん

身さへ浮ぶと覺え申し候。烈しき音するこの川の水に、あらず身を歎く涙に。

返事のかう書かれた美くしい字を見ても立派な姫樣であることが知れて、戀しく思はれるのであつたが、京から車がもう來たなどと家來が急がすので、姫樣にはもう逢ひに行かずに、

『宮樣が山からお歸りになつた頃に必ず來ます。』

と家従にだけ云つて歸り仕度をした。霧に濡れた著物は皆この男に遣つて、新しく取寄せたのを薫の君は著た。道道も辨と云ふ老女の云つたことが薫の君は氣にかかつた。まだ想像して居たのとはまるで違つた美くしい人であつた女王達が面影に添つて離れない。やはり自分は若い心を持つた人間である。遁世の境に入ることは出來さうにないと云ふことを薫の君は思つた。家へ著くと直ぐ手紙を書いた。

初めての御對面にうちつけなることを多く云ふと思ひ給はずやと心おかれ候うて年頃の思ひは何一つえ聞え出でざりしは思ふも苦しく候。申し上げ置きしやうに、今よりのちは御邊りにも心安く交はらさせ給へ。宮の山籠り果し給ふ日も承り置き、本意なき秋霧の隔てを去りて法の御敎承るを望み居り候。

使の左近尉に、辨を訪ねて手紙を渡すやうにと薫の君は命じた。家従が寒さうに慄えて居たことを思ひ出して、料理を入れた折詰をいくつ

も作らせてそれも持たせてやつた。その翌日はまた寺においでになる宮に使を出した。山に籠つて居る僧達が寒さに向ふ時節がら著物が欲しいであらう、宮から夫を布施にお出しになるが好いであらうと思つて、絹や綿や法服を澤山に持たせて上げた。其れは宮が勤行をお濟せになつてお歸りになる日であつたので、一緒に行をした僧達、その外寺に居る者皆に衣服を一通りづつ揃へてお與へになつた。八の宮の家従は薫の君に貰つた艶な美くしい狩衣と、白綾の著物のなよなよといい香に匂ふのを著たが、身體は變へられないから、似附かない匂ひを人からごうしたことかと咎められて、却ていらいらとした苦しい思ひをするのであつた。香りをなくしてしまふ工夫がないかと考へてばかり居た。薫の君は宇治の女王から來た返事の懷しい書き樣を嬉しく思つて眺めて居た。山莊の人はお歸りになつた宮に源中將から姫樣に手紙の來たことをお話した。

『戀をする男としてあの人を扱つては却て氣の毒だ。普通の若い人とはまるで違つた人なんだから、死後まで氣に掛ると何時か一寸私が云つたことのあつたのを、それでは女王と結婚をする方が私の爲に好くないかと、さう思つてくれたのかも知れない。』

なぞと宮は云つておいでになつた。宮から薫の君へも山寺への音問の禮の手紙をお遣りになつた。薫の君はまた宇治へ行かうと思つた。匂の宮がよく宇治の宮のことをお云ひになつて、そんな所に理想的な美人を見たならどんなに興味が深いか知れないなどとお云ひになるので、宮の物好なお心を煽つて女王の一人を戀しくお思はせしようと、こんなことを心に描いて靜かな夕方に二條院へ行つた。薫の君は霧の中の曉月夜に見た夢のやうな姉妹の美くしさを委しくお話した。言葉を盡して稱へて居た。匂の宮は切に床しくお思ひになるやうである。自身の思ひ通りに事のなつて行くのが面白くて、ますますお心

をそそるやうなことを薫の君は云つた。

『あなたは女王さんから來た手紙を見せてくれないね。私ならきつと見せるのだけれどね。』

と宮は恨めしさうにお云ひになつた。

『さうで御座いますね、澤山お貰ひになるそんなものの端だけでも今迄拜見させて頂いたことは御座いませんね。お愼み遊ばすけれど、其人を私の戀人には餘り過ぎた人だと思つて、あなたにお薦めしたいと思ふやうな忠實な心を私は持つて居るのですよ。併しどうしてあなたが接近していらつしつたら好いか、こんな時に身分のないものは何でも心安く行きますがね。私は實際宇治の姫樣達を佛臭いぎごちない人だらうとばかし今迄は侮りきつて居たのです。戀をしようなどとは夢にも考へたことがなかつたのです。月の明りで見た私の目が間違つて居ないなら、確かに得易くない美人です。

世の中にはこんなことがあるものですね。顔ばかりぢやありませんん、總ての樣子が最上の美をなして居ます。』

などと云つて居るうちに、初めの調子と違つた眞面目さも見えて來た。珍しく斯うまでこの人が興奮して語るのを見ると、一通りの美人ではないに違ひないと匂の宮はいよいよ宇治の空がなつかしくお思はれになるのであつた。

『あなたはもつと深く戀人に近寄ることを骨折つてしたまへ。私のためにもよく見ておいてくれ給へ。』

宮はかう云つて薫の君に勸めておいでになつた。御自身が輕輕しく外の家へ出入りすることを遺憾にお思ひになることがお顔に溢れて見えるのををかしく思つて、薫の君は、

『併し私はさう云ふことは廢しませう。私の人生觀が破れてしまひます。自分の心が心にかなはない狂人じみたものになつたら困り

ますから。』

こんなことを云つた。

『また厭世風を振り廻すのだね。いいよ、私は厭世家がどんなになつて行くか監視して居るよ。』

と宮はお笑ひになつた。薫の君の心は老女の辨が語らうとしたことに少からず動搖されて居る。あるものに近附かうとする時の味氣なさや怖ろしさは前の疑惑の中にあつた時よりも勝つたものである。それで美くしい女懷しい人と思ふ心はあつても、まだそれ程この人を戀のただ中に伴れて行かないのであつた。十月の月初めに宇治へ行かうとした。網代の氷魚の漁期であるから、見物がしたいと云つて家來達は大勢で附いて行かうとしたが、つまらないことだと云つていつもの通り質素な人數で薫の君は宮の山莊へ來たのであつた。八の宮はお悅びになつて所の物の馳走をいろいろとおすすめになつた。日

が暮れてから、前に講じておいでになつた經文の解の續きを宮はお聞かせになり、また阿闍梨を寺からお招きになつて、その人の議論をもおさせになつた。宮のお傍でそのまま泊つた。薫の君は、川風の荒さに木の葉の吹き散らされる音や、波の音のするのに寢附くことも出來ないのであつた。山風の趣と云ふこともお餘りに過ぎてもの恐しい氣がするのである。もう明方に近いであらうと思ひながら、この前の曉月夜が戀しく思ひ出されて、宮に寢ながら申し上げて居る話を、音樂の方に態と持つて行くやうにして、

『先日夜明に參つて甚い霧に驚かされました時、珍しい樂の音をほんの一くさりだけ承ることが出來ました。是非一度よく靜かに伺ひたいと、それからは始終京に居ります時も思つて居るので御座います。』

と云つた。

『さうですか。私ももう今のやうになつてからは、昔彈いた琴なども皆忘れてしまつた。』

かう宮は云つておいでになつたが、人を呼んで一絃琴をお取寄せになつた。

『似合はなくなりましたよ。一人では彈けさうにない。あなたが先に何か彈き出して下さい。』

と云つて青年の客に琵琶をお渡しになつた。薫の君は少しばかり彈いたが、

『先日此方で承つた同じ琵琶の出す音とは思はれません。樂器にも氣の毒な氣が致します。』

と云つて止めてしまつた。

『あなたも上手なことを云ふ。そんな立派な樂手がこんな山蔭に居るものですか。』

こんなことをお云ひになつて、宮は一絃琴をお彈きになつた。心細い趣のある凄い樂聲である。木立を吹く風の音と錯綜するのがさうも思はせるのであらう。宮は一曲でお止めになつた。

『私の處に十三絃で時時上手らしい音を出す者がありますよ、併し餘り稽古を積んだのぢやありませんから、川の波の相手位をして居て相當なのですが。』

と云つたあとで、姫樣達の方へ琴を彈くやうにと命じてお遣りになつたが、何時やら不用意な時にその人に聞かれたのさへ恥しくてならないのに、わざわざ所望されて彈きながら、上手でないのがどんなにをかしく思はれるであらうと考へて、姫樣は二人とも琴に手を觸れようともしなかつた。度度宮は勸めておやりになつたが、彼方ではやはりきかない。薫の君は遺憾に思つた。宮はかう云ふことから、姫樣についての話を初めておしになつた。

『かう云ふ風に世間の人らしい禮儀も知らないで居る女王等ですから困つたものです。』

暫く間をお置きになつて、また、

『女王の居ると云ふことさへも人に知らせない迄にして、今迄は私があるだけの力で保護して大きくして來ましたが、自分の生命と云ふものがもう危くなつて來たのですから、殘つた後のことを思ふと、どんなみじめな目を見るかと氣になりましてね。生死の境にもやはりそれが私の心を澄ませないもとになるでせう。』

とお云ひになるのを聞いて、薫の君はお氣の毒でならなかつた。

『御後見などと云ふ立派な役は十分に出來ませんでも、私を此方のお身内とお思ひを願つて、出來ますだけのことはさせて頂きたいと思つて居るので御座います。もしさう云ふ不吉な日がきましたなら、私があなたより長生して居りますことは女王樣方のお力になるこ

とで御坐います。』

かう云つた薫の君を宮は頼もしくお思ひになつた。佛前の朝の勤めを宮がおしになる間に、薫の君は辨を呼び出して逢つた。辨は女王方の世話役をして居る。齢は六十に少し足らぬ程の人で、品の好い女である。柏木の君が苦しい戀に惱んで其れがために死んだ始末を語つて泣いた。他人の事であつても哀れに思ふ筈のことであるのに、年來その眞相を知りたいと思つてた最も近い親身の人の事を聞くのであるから、薫の君の涙も留度なく流れた。

『私についての昔話を知つた人のあると云ふことも、また自身のことに就いても夢にも今日まで氣が附きませんでした。その恥しいことを外にも知つた人があるのですか。』

『侍從と辨の外に誰も知つたものは御座いません。またその二人から一言でも他人に洩らしたことは御座いません。私のやうな者で

御座いますが、夜晝お傍に居つたもので御座いますから、自然大納言樣のお物思ひのわけを知るやうにもなり、また私にだけお心を許してお話しになつたこともあるので御座います。私と侍從との文通に致しまして、その中で御双方のお書きになつたものもお取交しになつたので御座います。くはしくは恐れ多くて申されません。御遺言に伺ひましたことで、當の方にお逢ひ申し上げないで居りますうちは、そのことばかりが氣がかりで御座いました。お目にかける品もあるので御座います。全く夢で御座いますよ。前の世界のことをお思ひ下さいまし。』

辨はそれから薫の君の生れた時のことをくはしく話すのであつた。

『私の母も大納言樣のお亡れになつたのが病のもとになりまして死んだので御座います。その時分に私はある善くない男に見込まれて居りまして、其男が詭計に載せまして西國の果まで私を伴れ出し

ましたので御座いました。あなた様のことはもとより、京の話一つ聞くことの出來ない身の上にされてしまつたので御座います。其男が死にましてもまだ十年は歸ることが出來なかつたので御座いましたが漸くの思ひで京へ參つて見ますと、まるで世界が變つて居るので御座いませう。この宮のお邸と實家とは近くだつたものですから、子供の時から上りつけて居りましたので、かうして老後の隱家にさせても頂いて居るので御座います。冷泉院の女御さんの方などへこそは昔の御緣で上つていいので御座いますが、花花しい所は身が退けるもので御座いますから、かう致して居ります。侍從は何時頃亡くなりましたので御座いませう。若盛りの人と思ひました人が皆大抵もう居りません。』

などと辨が長話をして居る間にすつかり明くなつてしまつた。

『あなたのしてくれる話は聞いても聞いても聞き足りない。何時か

また綴りとした場所で話して貰ふ機會を作りませう。その侍從と云つた人は、ぼんやりと覺えて居るだけですが私の五つか六つかの時に急病を起して死にました。私はあなたに逢ふことが出來なかつたなら、自分の何であるかも知らないままで死んでしまふのでした。嬉しく思ひます。』

と薫の君は云つた。堅くかさ低く卷き合せた反古の黴臭いのを入れた袋を出した。

『あなた樣のお手でお燒きになるなり何なりお始末を下さいまし。もう駄目だと御自身の御病氣をお思ひになつた時に、この袋に反古を詰めて私にお渡しになつたので御座います。侍從に逢へたら手渡しいたしませうとばかし思つて居りました。』

と辨は云つた。薫の君はその袋を受取つてよくも中を見ずに懷に入れてしまつた。こんな老人と云ふものは問はず語りにその事を人に